

第三章 軍備縮少ノ議題ニ関スル露国第二回提案及各国ノ意向

三 明治三十二年一月十日 露国外相「ムラヴィエフ」ヨリ
(十二月辛日) 露国駐劄林公使宛

軍備縮少會議議題ニ関スル第二回提案回章

伯爵 ムーラヴィエフ

日本国特命全權公使男爵 林董貴下

以書翰致啓上候陳ハ我至尊ナル皇帝陛下ハ萬国人民ヲシテ
確實永久ノ平和ヲ保持セシメ現時驚クヘキ兵器ノ發達ヲ停
止セントメ最良ノ方法ヲ講究スルノ目的ヲ以テ萬国会議ヲ
開設スルコトヲ露京ニ代表者ヲ有スル列強国政府ニ提議ス
ヘキ旨昨年八月本大臣ニ命セラレ候當時斯慈仁の計画ハ何
等ノ障害ナクシテ速カラス決行セラルヘキ見込有之列強国
政府力該提議ヲ是認シタルハ豫メ其成功ヲトスルニ足リ且
ツ露国政府力列強国ノ同情ヲ喜フト同時ニ全地球ノ人民ヨ
リ絶ヘス熱心ナル同情ノ保證ヲ得タルハ甚タ満足スル所ニ
有之候

シ得ルモノトシテ之ニ関スル討議ノ途ヲ開クコト

若シ各国政府ニ於テ右ノ基礎ニ依リテ萬国会議ヲ開クニ適
当ナル時期ト認メラルルニ於テハ右議題ニ関シ今ヨリ各国
政府ノ協議ヲ遂ゲ置クコト必要ナルヘント存候

萬国会議ニ提出セラルヘキ議題ハ左ノ如ク約言スルコトヲ
得ベシ

第一 或ル一定ノ期限間ハ陸海軍ノ現数及其ノ經費ノ額ヲ
増加セサル件ニ関スル協定ヲ為シ且將來ニ於テ現今ノ兵
数及經費ヲ減少スルヲ得ヘキ方法ヲ豫メ講究スルコト

第二 陸海軍ニ於テ新發明ノ火器及爆裂藥若クハ現今大砲
及小銃ニ使用スル火藥ヨリ一層強烈ナル新火藥ノ使用ヲ
禁止スルコト

第三 現在非常ナル強力ヲ有スル爆裂藥ヲ野戰ニ使用スル
ノ制限ヲ定メ且輕氣球ヨリ彈丸若クハ爆裂藥ヲ投下シ又
ハ他ノ類似ノ方法ヲ以テ之ヲ投スルヲ禁止スルコト

第四 海戰ニ於テ水底水雷艇若クハ潜水水雷艇或ハ他ノ類
似ノ破壊器ノ使用ヲ禁シ今後ハ衝角附軍艦ヲ製造セサル
コトヲ約定スルコト

第五 千八百六十四年「ジュネーヴ」條約ノ條項ヲ千八百
六十八年追加條約ノ基礎ニ依リ海戰ニ適用スルコト

第三章 軍縮第二回提案ト各国ノ意向 三四

右ノ如ク輿論ノ傾向ハ一般平和思想ヲ賛成シタルニ拘ハラ
ス近時邊ニ政治ノ風潮ヲ一変シ更ニ軍備擴張兵力増進ニ着
手セル政府ハ一ニシテ足ラス是ニ於テ列強国政府ハ今日果
シテ昨年八月^{十二日}付廻文ノ意見ニ付萬国平和會議ヲ開設
スルニ適當ノ時期ナリト認メラルルヤ否ヤノ疑問ヲ生スル
ニ至リ候

乍去帝國政府ハ目下政界ヲ動揺セル妖雲消散シテ漸ク鎮靜
ニ復シ該會議ヲ開クヘキ好時期ニ至ルヲ希望スルニ依リ左
記ノ目的ニ基キ今ヨリ列國ノ意見ヲ交換スルコトハ出來得
ヘキ義ト思考致候

一 陸海軍備ノ擴張ヲ防止スルノ方法ヲ至急ニ講究スルコ
ト

現今ノ如キ軍備擴張ノ時ニ當リテ本問題ハ最モ急速
ニ之ヲ決定スルノ必要アリ

二 外交上ノ範圍内ニ於ケル平和的方法ヲ以テ交戰ヲ豫防

第六 前項同一ノ理由ニヨリ海戰中及海戰後ニ於テ遭難者
救助ニ從事スル船舶若クハ端艇ニ中立權ヲ許スルコト

第七 千八百七十四年比律悉ノ萬国会議ノ成案ニシテ今日
ニ至ルモ未タ各国ノ批准ヲ經サル戰時ノ法律慣例ニ関ス
ル宣言書ヲ改正スルコト

第八 國ト國トノ交戰ヲ豫防スル目的ニ於ケル厚意幫助居
中調停自由仲裁ノ精神ヲ共諾シ之ヲ實施スルノ方法ト一
様ノ手續ヲ協定スルコト

各国政治上ノ關係及條約ニ依テ定メラレタル事項ニ関スル
一切ノ問題ハ各国政府ガ共諾シタル議題ニ直接ノ關係ヲ有
セサル一切ノ問題ト共ニ全ク之ヲ會議ニ附スヘカラサルコ
トハ勿論之義ニ有之候

本大臣ハ茲ニ貴下カ本件ニ関シテ貴国政府ニ請訓セラレン
コトヲ冀望シ大國ノ都會ハ常ニ各種政治上ニ於ケル利害ノ
焦点ナルヲ以テ全地球ノ諸國力同一ナル程度ニ於テ利益ヲ
有スル所ノ事業ノ進行ヲ妨クルノ虞アルニ依リ我至尊ナル
皇帝陛下ハ特ニ本問題ノ成効ヲ希圖セラルル為メ大國ノ都
會ニ於テ萬国会議ヲ開設セサルヲ得策トセラル、旨ヲモ同
時ニ貴国政府ヘ御通知相成度及御依頼候本大臣ハ茲ニ貴下
ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千八百九十八年十二月三十日聖比特斯堡ニ於テ
(九十九年一月十日)

三五 明治三十二年一月三日 露国駐劄林公使ヨリ
青木外務大臣宛(電報)

軍備縮少露国第二回提案要領通報ノ件

一月十二日發
〃十五日着

青木外務大臣 在露 林 公 使

第二号

露国外務大臣ハ一月十一日一編ノ回章ヲ本官ヘ手交セリ其要領左ノ如シ
昨年八月軍備縮少ノ議ヲ提出シ列国政府ノ多数及人民一般ハ社会ノ上下ヲ問ハス熱心之ニ賛同シタル以来政況著シク変遷シ諸強國ハ益々其軍備ヲ拡張スルニ至レリ、此不定ノ時期ニ際シ各強國ハ現時ヲ以テ該提議ヲ論究スルノ好機ト認ムルヤ否ヤハ疑ハシキ所ナリト雖トモ政治上刻下ノ紛擾ハ遠カラス妥定セラルヘキモノト希望スルガ故ニ露国政府ハ左ノ目的ヲ以テ各強國間ニ意見ノ交換

ノ「ブルッセルス」會議ノ決定ニ基キ修正スルコト
第八、調停、居中調停若クハ撰択仲裁ヲ承諾スルコト並ニ之ヲ適用法ヲ一定スルコトヲ約定スルコト

各国間政治上ノ關係及條約ニ依リ規定セラレタル事態並ニ該條約等ニシテ直接本會議問題ニ關係ヲ有スル事項ハ討議ニ付スヘキモノニ非サルコトハ勿論ナリ而シテ露国政府ハ該會議ハ政治上ノ利害關係常ニ集中シ居ル強國ノ首府ニ於テ招集セサルヲ以テ得策ト思考ス

三六 明治三十二年一月六日 露国駐劄林公使ヨリ
青木外務大臣宛

前同伴原文送付ノ件

機密第二号 三月三日接受

露国政府ノ提議ニ係ル列国會議々案原文送付ノ件
弭兵保和ニ関スル列国會議ニ於テ討議スベキ議案トシテ本月十日附ヲ以テ露国政府ヨリ提出候回文ニ付テハ翌十二日電報第二号及本日追加電報第三号ヲ以テ其要領及具報置候処別紙原文写差進候間之ニ就キ委細御承悉相成度將又英、仏、独、伊、奥、白耳義及米國ノ七ヶ所ニ在ル我公使館ヘ

ヲ始ムルコトハ今日ニ於テ実行シ得ルモノト信ス即チ
(一)軍備制限ノ方法ヲ講スルコト (二)列国外交問題ヲ処分スルニ方リ平和ノ手段ヲ用ヒ以テ交戦ヲ防止スルノ方法ヲ準備スルコト、若シ各列國カ今日ヲ以テ開議ノ好時機ト判定スルニ於テハ露国政府ハ左ノ諸項ヲ同會議ニ於テ講究スヘキ問題トシテ提出セントス

第一、現在ノ陸海軍々備ヲ拡張セサルコトヲ規定スルコト

第二、新種ノ軍器及爆發物並ニ現今ノモノヨリ尙強力ナル火藥ノ使用ヲ禁ズルコト

第三、戰場ニ於テ強烈ナル爆發物ヲ用ヒ又輕氣球等ヨリ射撃物及爆發物ヲ射下スルヲ禁スルコト

第四、沈航及潜水水雷艇及同種ノ破壞的機關ヲ禁スルコト並ニ破壞艦ヲ製造セサルコトヲ約定スルコト

第五、千八百六十四年ノ「ゼネーヴァ」約定ノ規定ヲ海戦ノ場合ニ於テ千八百六十八年ノ追加條項ノ基礎ニ因リテ採用スルコト

第六、海戦中及海戦後沈没艦船救助ノ船舶ヲ中立ノモノト為スコト

第七、交戦ノ法則及慣例ニ関スル宣言ヲ千八百七十四年

ハ參考トシテ同十二日夫々写文及送付置候尙ホ右會議ニ関スル露国政府將來ノ意向等ニ付テハ探知次第可及御報候此段申進候 敬具

明治三十二年一月十六日

在露国 特命全權公使男爵 林 董(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

註 附屬書省略

三七 明治三十二年一月六日 青木外務大臣ヨリ
露国駐劄林公使宛(電報)

軍備縮少案ニ對スル任國ノ態度調査方ノ件

Hayashi

Petersburg

3. Ascertain and telegraph attitude of the Govt. to which you are accredited as well as tendency of public opinion regarding the latest circular of Russian Minister for Foreign Affairs on the subject of proposed Peace Conference. Transmitt above to 在英公使、在独公使、在仏公使、在奥公使、and 在米公使.

Aoki.

Jan. 16 '99.

三八 明治三年一月七日 英国駐劄加藤公使ヨリ
青木外務大臣宛(電報)

軍備縮少案ニ関スル英国側意向通知ノ件(一)

一月十七日發
十九日着

青木外務大臣

在英 加藤 公使

第貳号

今回露国ヨリ更ニ提出シタル軍備縮少ノ回章ニ関シテ「タイムス」新聞ハ全計畫ヲ以テ空中樓閣ナリト称シ露国皇帝ノ意志ハ極メテ高尚ナリト雖モ其補弼タル國務大臣等ノ計畫セル方法ニ至テハ到底実行シ得ヘキモノニ非ラス「論ヨリ證拠」ト云ヘル諺アリ今ヤ露国ハ軍用鉄道ヲ敷設シ義勇艦隊ヲ増加シ居ルニ方リ寧ゾ他国ガ軍事上ニ理學ヲ応用スルヲ止ムルヲ得ヘケンヤト云ヘリ、平和協會其他少數ノ徒ヲ除キ右ハ当国ニ於ケル輿論ヲ代表スルモノト本使ハ思考ス

ニ去ル八月以降列国ハ露国ノ提議ヲ承知シ居ルニモ拘ラス或ハ軍備ヲ擴張スルモノサヘアリテ世ニ發願セル徵候ハ反テ露国提議ノ本意ニ戾ル処ナキニアラス故ニ列国会議ノ成立スラ頗ル覺束ナシトシテ左ノ如ク批評ヲ下シ候

露国外務大臣ノ公文ハ前記徵候ヲ指摘シタル後「然レトモ一般ノ形勢靜寧ニ復シ會議ノ成功ヲ期スルノ望未タナキニアラスト」云ヘリ然トモ能ク此言辭ヲ玩味シ廻文中ニ會議ノ期日ヲモ指定セサルコトヲ見ルトキハ露国政府ニ於テモ内心其提議ノ果シテ能ク其實ヲ挙クルコトヲ得ヘキヤヲ危ムモノノ如ク或ハ遂ニ列国会議ヲ見ルニ至ラサルヤノ憂懼ヲ漏スルニ似タリ該公文ニハ列国会議ヲ開クニ先チ豫備手段トシテ諸国政府ト今回提出ノ議題ニ関スル意見ヲ交換センコトノ希望ヲ述フルモ而カモ各国政府ニ於テ時期未タ到来セスト認了スルニ於テハ此豫備手段サヘモ之ヲ督促セサルモノノ如シ

次キニ列国会議ヲ開クニ付必要條件トシテ現時ノ狀態ヲ變更セサルヘントノ發意ニ對シテハ諸新聞紙モ亦タイムスト其意見ヲ一ニシ露国政府ガ昨年八月以來諸國ノ意嚮ヲ觀察シ此條件ヲ附スルヲ必要ト認メタルモノニシテ最モ其當ヲ得タルモノナリト評論致候デリー・ニューズニ曰ク若シ

三九 明治三年一月七日 英国駐劄加藤公使ヨリ
青木外務大臣宛

前同伴(二)

公第九号

三月三日接受

兵備縮少ニ関シ露国政府ヨリ提出シタル
議題之件

列国兵備縮少ニ付露国政府ノ提議ニ関シテハ追々及報告候処去ル十一日同国外務大臣ハ新ニ回章ヲ露京駐劄各国公使ニ致シ列国会議ニ提出セントスル議題ヲ示シ之ニ對スル各国政府ノ意見ヲ承知シタキ旨申入レタル趣ニテ右回章ニ関シ当府發兌ノ諸新聞紙カ下シタル評論ハ多少御參考ニ可相成殊ニタイムスノ論說ハ最モ克ク当国人ノ思想ヲ表章セルモノト認メラレ候間他二三新聞ノ論說ト共ニ左ニ要核及報告候

タイムス(一月十七日)ハ先ツ英国程平和ヲ希望スル国ナキヲ言明シ次キニ露国皇帝ノ高尚ナル意思ニ對シ賞讃ノ辭ヲ呈シ本件ハ簡純ナル主義ノ發表ヨリ一步ヲ進メテ実行ノ難易ヲ議スル場合ニ至リタルコトヲ述ヘ其実行ノ困難ナルヲ概論シタル後終ニ至リテ今回露国外務大臣カ發表シタル議題ハ毫モ実行ノ障害ヲ除去スルニ足ラサルヲ断言致候現

此保證ナク列国会議ニ於テアルサス・ロレーンノ問題ヲ提出スルカ如キコトアラハ独逸ノ委員ハ直ニ其席ヲ退去スベク或ハ埃及問題ヲ惹起スカ如キ恐アルトキハ英国政府ハ素ヨリ其ノ委員ノ派遣ヲ拒ムヘシ而シテ米國亦フキリピン島ノ処分ニ関シテハ列国議員ノ容喙ヲ許サルヘキナリ

然トモ前記豫備手段並ニ開會ノ條件ハ更ニ露国提議ノ実行ヲ容易ナラシムルモノニアラストテ「タイムス」ハ其論鋒ヲ進メ露国議題ヲ大別シテ三種トナシ左ノ如ク批評致候
第一 軍備擴張ノ停止即チ一定ノ年限ヲ期シ軍備ヲ擴張セ

ス又軍費ヲ増加セサル案ハ極メテ尤モナル提案ナレトモ此方法ハ萬國相通シテ誠実ニ行ハル、コトヲ期シ得ヘキカ議院制度ノ設アル諸國ニ在テハ國庫ノ支出ハ列國之ヲ觀察シ其軍備ニ費消スル金額ヲ明知スルコトヲ得ヘキモ如此制度ヲ有セス軍備ノ支出ニ何等制肘ヲ受ケサル國ニ在テハ果シテ能ク自ラ制シテ列國ニ對シ信義ヲ守ルコトヲ期シ得ヘキカ現今何レノ國ト雖モ未タ其競争者ニ對シ斯程ノ信用ヲ措クコトヲ肯セサルナリ其追々軍備ヲ縮少スル案ノ如キハ先ツ前段停止ノ行ハル、ヲ待テ後始メテ講究スヘキモノナリ

第二 戦争ノ害毒ヲ減少スルコト即チ非常ノ爆發力ヲ有ス

ル火薬ノ使用ヲ禁シ空中ヨリ被裂彈ヲ墜落シ或ハ海底水雷艇ノ製造ヲ廢止シ軍艦ニ衝突器ヲ備ヘサルカ如キハ素ヨリ異議ヲ容ルヘキニアラサルモ露国政府ハ如何ナル妙計ヲ以テ列國ヲ誘導シ之ニ同意セシメントスルヤ既ニ露國ヨリ此議題ノ發表アルト同時ニ仏國ニテハ海底水雷艇ノ製造ヲ命シ仏國ノ一新聞紙ハ同種ノ艇船製造ノ為メ軍費ノ補充トシテ義捐金ノ募集ヲ公衆ニ向テ開始シタルニアラスヤ露国力軍備停止ニ関シ有スル空想モ亦茲ニ至リテ極マレリト云フヘシ

第三 列國ノ調停及仲裁即チ可成兵力ノ衝突ヲ避ケ行ハルヘ限リ調停及仲裁ノ方法ヲ用ユルノ主義ヲ列國ニ於テ承諾スルノ義ハ今日新ニ之ヲ唱道スルノ必要ナク列國既ニ其主義ノ完美ナルヲ認ムルモ之ヲ実行スルノ極メテ難キニ困ムモノナリ凡ソ露國ノ提出ニ係ル議題ハ各国力能ク其條約上ノ義務ヲ遵守シ敢テ違フコトナキヲ豫想シテ之ヲ編製シタルモノナレトモ吾人ハ未タ此豫想ヲ以テ安ンスルコトヲ得サルナリ昨年八月露国力平和ノ提議ヲナシテ以来独逸合衆國土耳其等何レモ皆其軍備ヲ擴張セサルナシ而シテ右提議發案者タル露國ニ於テ殊ニ然リトス故ニ露国力自分ハ主トシテ作戰上ノ目的ニ出ツル鐵道ヲ

ミナラス徒ラニ事ヲ好ムニ出ツルモノニシテ公平ニシテ實着ナル判断ヲ要スル政府ノ談判ニ反テ意外ノ障礙ヲ与フルニ至ルヘシト云フニ至リ候同新聞ハ又露國ノ議題ニ関シ軍備擴張ノ停止ハ主義ニ於テモ到底之ヲ承認スルコトヲ許サス見ヨ何レノ国力其隣邦ノ為メ其國防ヲ減スルコトヲ肯スヘキ露國ハ其艦隊又ハ軍隊ヨリモ一層必要ナル鐵道ノ布設ヲ停止スルコトヲ自ラ肯シスヘキカ又如此盟約ハ好ク遵守セラルヘコトヲ得ヘキヤ若シ其約ヲ破リ僅ニ一聯隊ヲ加ヘ或ハ一艦ヲ増スモノアルモ列國ハ之ニ對シ戰ヲ挑ムヘキカ要スルニ今回ノ議題ハ萬邦ノ平和ヲ期図スル手段トシテハ頗ル奇ナリト云ハサルヲ得ス又戰爭ノ害毒ヲ減少スルノ方法ハ到底列國陸海軍省ノ同意スヘキ限リニアラスト云ヒ軍艦ニ衝突器ヲ備ヘサルコトヲ主張スル上ハ何故ニ大砲ヲモ廢止スルコトヲ唱ヘサルヤトテ新議題ヲ冷靜シ果テハ戰爭ハ避ケ得ラルヘモノニアラス破壊器ノ製造ハ平和ヲ保證スル所以ナリト断言シ左ノ言辞ヲ以テ其論說ヲ完結致候

要スルニ露帝ノ顧問官カ案出セシ方法ハ全ク成功ノ見込ナシ然レトモ他ニ亦方法ナキニアラス露国宜シク先ツ其例ヲ示セ若シ露國ニシテ進ンテ其兵力ヲ減少スルニ於テ

建設シ且ツ義勇艦隊ヲ増加シツツ一方ニ於テ他國ヲシテ科学ヲ軍事ニ応用スルノ非ナルヲ悟ラシメントスルハ尙ホ古ニ返リテ弓矢ヲ使用スルノ是ナルヲ彼等ニ首肯セシムルノ難キカ如クナルモ元来是等ノコトニ就テハ実例ヲ以テ示スコト口頭ノ說法ヨリ有益ナリ露國ニシテ適當ノ方法ヲ採ルニハ平和ノ目的ヲ達スルニ付少ナカラサル種補ヲ与ヘ得ヘシトテ大ニ露國ノ言行一致セサルコトヲ咎メ終ニ露帝ノ希望ハ最モ高尚ナルコト吾人之ヲ疑ハス然レトモ其大臣ノ画策シタル方案ハ断シテ帝ノ希望ヲ達スルニ足ラサルナリト結論セリ

「タイムズ」ノ所論概要前記ノ通りニ有之露帝ノ提議ニ對シテハ該紙ハ始メヨリ其行ハレサルヲ主張シ居タリシモ今回ニ至リテハ稍攻撃的口調ヲ用ヒ新議題ニ對シテハ憚ル処ナク其所見ヲ開陳シ帝ノ希望ヲ達スルニハ前途猶遠ナルヲ断言スルニ至リ候

「スタンダード」モ亦タイムズト說フ同フシ僧侶愛世家等ハ露帝ノ發議ヲ贊成シ頻リニ平和ヲ唱フルモ此輩ハ半ニ帝ノ思想ノ雄大ナルニ眩惑シタルモノニシテ未タ実行ノ難易ニ思至ラサルモノナリトテ彼等ノ運動ヲ一笑ニ附シ去リ彼等ノ集会演說等ハ何等平和ノ目的ヲ助長スルニ足ラサルノ

ハ列國亦之ニ從ハン而シテ露國ハ最モ安全ニ減兵ノ試驗ヲ為シ得ル國ナリ何トナレハ外國ノ侵攻ニ對シテハ露國程堅固ナル國ナク防禦ノ為メニハ露國程大兵強艦ヲ要セサル國ハアラサルナリ

之ニ反シデリー・ニューズハ兼テヨリ極点ノ平和新聞ニ有之候ヘハ露國ノ議題ヲ賞賛シ居ルモ是レ單ニ不合從派僧侶、平和協會員其他國民一少部分ノ意思ヲ代表スルニ過キズシテ帝國思想ノ發達シ來レル今日英國一般人民ノ意思ハ前記タイムズ・スタンダードノ所論ト其揆ヲ一ニスルモノナリト觀察致候要スルニ露國ノ議題中ニハ負傷者ヲ救護シ病院船ノ安全ヲ計ル等多少実行ノ見込アルモノナキノミナラス現ニ幾分力実行セラレ居ルモノモ有之候ヘ共其最モ重要ナル議題ニ至リテハ前記ノ通り当國有力ナル諸新聞紙ハ到底実行ノ望ナキモノト見做居候依テ其次第御參考迄ニ別紙寫ノ通り本日及發電候猶今後本件ニ関スル當國人心ノ傾向ニ関シ注意スヘキ事項ハ時々報告ヲ怠ラサル積リニ有之候ヘトモ不取敢右及具報候 敬具

明治三十二年一月十七日

在英 特命全權公使 加藤高明(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

追テ本文電信發送ノ後閣下ヨリ來電有之本件ニ對スル当
国政府ノ態度並ニ公論ノ傾向電報可致旨御訓令ニ有之候
処公論ノ傾向ハ別紙電報ニテ御承知相成候コトト存候ニ
付別ニ返電ニハ及ヒ不申候又当国政府ノ態度ハ追テ相髓
メ候上可及具申候此段添テ申進候

四〇 明治三二年二月七日

独国駐劄井上公使ヨリ
青木外務大臣宛（電報）

軍備縮少案ニ関シ独乙側意向通知ノ件（一）

一月十七日發
〃二十日着

青木外務大臣

在独 井上公使

第弐号

一月十六日貴電ニ関シ本官ハ本日独国外務大臣ニ面会シタ
ルニ同大臣ノ語ル所ニ依レハ独国皇帝及政府ハ露国皇帝ノ
博愛ナル計画ニ對シ深厚ナル同情ヲ表スト雖モ同大臣ハ今
回露国外務大臣ノ提出セル回章ニ掲載シタル提案ハ実行ス
ルコト至難ナルヘシト思考スト云フ又同大臣ハ目下該問題
ヲ論議スルハ時尚早キヲ以テ独国政府ハ之ヲ平和會議ノ討

ハ侵略ノ目的ヲ有スルモノナリトノ非難ヲ為ス能ハザルベ
シ云々

四二 明治三二年一月九日

仏国駐劄栗野公使ヨリ
青木外務大臣宛（電報）

軍備縮少案ニ関シ仏国側意向通知ノ件（一）

一月十九日發
〃二十一日着

青木外務大臣

在仏 栗野公使

第四号

今回露国ヨリ提出シタル回章ニ関シ仏国ノ態度ハ變更ナ
シ、新聞紙ハ皆ナ沈黙シ居レドモ独リ夫ノ外務省ノ機關ト
シテ知ラレタル「ル、タム」新聞ハ左ノ如ク記述セリ即チ
仏国ニ取リテハ旧慣ニ因ルモ亦タ露国トノ關係上ヨリスル
モ決シテ躊躇スヘキニ非ラス仏国ハ活眼ヲ開キテ平和會議
ニ列スヘシ然レトモ露国皇帝ノ招集ニ応シタリトテ必スシ
モ該回章ニ記載セル如キ復雜ナル方法ニ同意ヲ表シタルモ
ノト見做スヘキニ非サルナリ

議ニ一任セントスル旨ヲ告ケタリ要スルニ本官ノ察スル所
独国政府ハ他強國ノ挙動ヲ注視シ居リ自ラ何等確乎タル態
度ヲ採リ若クハ他ニ率先スルコトヲ避ケント欲スルモノノ
如シ、当国新聞紙ハ概シテ沈黙シ居レリ

四一 明治三二年一月九日

露国駐劄林公使ヨリ
青木外務大臣宛（電報）

軍備縮少案ニ関スル瑞典国意向通知ノ件

一月十九日發
〃二十日着

青木外務大臣

在露 林公使

第四号

瑞典國議會ハ一月十八日ヲ以テ開会セラレ皇帝陛下ノ勅語
アリ其中ニ曰ク露国皇帝ノ發議ニ係ル平和會議ノ結果如何
ヲ論セス該會議力召集セラレタリトテ之カ為メ各国力其必
要ナル国防策ヲ等閑ニ附スベキニ非ズ、瑞典國ハ其現今微
弱ナル国防ヲ益々強固ナラシムルコトヲ常ニ努メサル可カ
ラス、陸海軍共ニ素ヨリ自衛ノ目的ヲ以テ組織セラレ居ル
モノナレハ何人タリトモ瑞典國ニ對シ軍備ヲ過大ニシ若ク

四三 明治三二年一月三日

英國駐劄加藤公使ヨリ
青木外務大臣宛（電報）

軍備縮少案ニ関シ英國側政府意向通知ノ件（三）

一月二十日發
〃二十二日着

青木外務大臣

在英 加藤特命全權公使

第四号

一月十六日貴電ニ関シ英國政府ハ未タ露国ヘノ回答振ヲ決
定セズ、同国外務次官カ本官ヘ語リタル所ニ依レハ露国外
務大臣ハ該回章ヲ露国駐劄英國大使ヘ手交スルニ方リ該回
章中ニハ各方面ヨリ提議ノ儘種々ノ事項ヲ列記シタレトモ
露国政府ニ於テモ其中ノ或ル事項ニ對シテハ同意シ難キモ
ノアルヘシト述ヘタリト云フ、本官ノ察スル所英國政府ハ
毫モ望ヲ屬セス然レトモ多分各事項ニ對スル意見ヲ表示ス
ルコトナク単ニ該會議ニ參列スルコトトナルベシ

四四 明治三二年一月二日

白国駐劄本野公使ヨリ
青木外務大臣宛（電報）

軍縮會議案ニ関シ白国側意見通知ノ件（一）

一月二十日發
〃二十二日着

青木外務大臣 在 白 本野特命全權公使 第三号

白耳義国外務次官ト会談ノ際同官カ其私見トシテ本官ヘ内密ニ語リタル所ニ依レハ平和會議ノ召集ニハ現今其時機宜シカラサルカ如キヲ以テ該會議ハ当分開会セラル、コトナカルヘシ、又各新聞紙ハ「ブルッセルス」府ヲ以テ其開会地ト指称シ居レトモ右ニ関シ白耳義国政府ハ未タ何等ノ申込モ受クス亦タ自ラ申出テタルコトモナシト云フ

四五 明治三十二年一月三十一日

奥国駐劄高平公使ヨリ 青木外務大臣宛（電報）

軍備縮少案ニ関スル奥国政府意向通知ノ件（一）

一月二十二日發
二十四日着

青木外務大臣

在 奥 高平全權公使

第四号

奥国政府ニ於テハ漸ク一月十七日ニ至リテ露国ノ回章ヲ接受シ之ニ関シ奥国外務大臣及同次官ハ未タ其意見ヲ決定セス然レトモ外務大臣ハ今回ノ回章ハ事實上最初ノ回章ト同様ナルモノト思考シ居レリ、而シテ此一事並同大臣ノ所言

ハ思考セサレトモ茲ニ不思議ナルハ両三日來陸軍ノ機關新聞ハ憤激ノ口調ヲ以テ近年増加セラレタル露国軍隊ニ対シ奥国軍隊ノ比較的ニ微弱ナルコトヲ屢々慷慨シ又歐洲ハ軍備縮少ノ提議ヲ露国ヨリ受ケタルモノナレハ露国ハ自ラ率先シテ軍隊ヲ縮少スルコソ論理ニ適フモノナリ、現今露国ノ陸海軍豫算ハ刻下ノ事情ニテ出来得ル限りノ多額ニ達シ又其軍備ハ全ク近世風ニ改良セラレタルカ故ニ露国ハ新式兵器ノ使用及軍費ノ増加等ヲ禁スル規定ハ之ヲ安心シテ提議スルヲ得ルモノナリト記載セリ

四六 明治三十二年一月二十四日

白国駐劄本野公使ヨリ 青木外務大臣宛

軍備縮少案ニ関シ白国側意向通知ノ件（二）

機密第老号信

三月三日接受

平和會議ニ関スル当国意嚮ノ件

弭兵保和ニ関スル列国会議ニ於テ討議スヘキ問題ニ関シ更ニ露国政府ヨリ各国政府ニ提出シタル討議案寫過般露国駐劄林公使ヨリ送附相成候ニ付不取敢本件ニ関シ当国政府ノ意嚮ヲ承知致置度存候間去ル二十日外務省ニ出頭シ外務次官ランベルモン男ニ面会シ色々問合候処此度露国政府ヨ

ニ依リテ察スルニ軍備縮少ノ提議ニ関スル同大臣一個ノ意見ハ最初ノ回章ヲ接受シタル節本官ヘ語リタル所ト同様ナルヘシト想像セラル、然レトモ奥国政府ハ平和會議ノ効果ニハ余リ信用ヲ置カサルモ単ニ露国皇帝ノ善意ヲ敬重スル為メ同會議ヘ参列スベシ、外務次官ハ本週中ニ其ノ意見ヲ語ルヘキ旨ヲ本官ヘ約セリ依テ右ハ追テ電報スヘシ、重モナル新聞紙モ今日迄ハ沈黙シ居レリ是レ奥国政府ニ於テ其採ルヘキ態度ヲ未タ決定セサルニ因ルモノナラント信ス而シテ其ノ態度ニ関シテハ其同盟国ト尚協議中ナルヘシト思考ス、斯ノ如ク奥国政府ハ本件ハ最も慎重ナル取扱ヲ為シ居ルコト明カナリ、有名ナル新聞紙（但シ政治上ニハ重大ナル勢力ナキモ發刊高多キモノナリ）中ニハ該回章ヲ非難スルモノアリ「甲」ハ曰ク露国皇帝ノ博愛ナル意思ヲ実行スルニハ時機宜シカラズ何トナレバ露国ハ西比利亞鉄道ノ完成、財政ノ整理及国家經濟ノ基礎ヲ固フセンカ為メ目下平和ヲ欲スルモノニシテ其意志ノ真偽疑ハシキカ故ナリト「乙」ハ曰ク露、仏、英ノ如キ三強國ニ於テ最も沈黙シテ最も熱心ニ軍備ヲ為シ居ル限リハ軍備縮少會議ナルモノハ實ニ矛盾ノ甚シキモノナリト論セリ、重ナル新聞紙カ沈黙シ居ル間ハ以上ノ所言ハ当局者ノ意志ヲ發表シタルモノト

リ提出シタル問題ハ何レモ極メテ重大ノ問題ニ付充分研究シタル後ニアラサレハ露国政府ニ対シテハ難及回答且ツ右回答前ニハ豫メ諸大國ノ意嚮ヲモ承知セサルヲ得サルニ因リ此旨在外公使ニ訓令ヲ發スヘキ積リナリ云々又開会地選定ニ関シテハ諸新聞紙ナドニハ已ニ当地ヲ以テ開会地ト指定セラレタルモノノ如ク伝唱致候ニ付実否如何相尋候処此点ニ付テハ何レノ政府ヨリモ奥国ハ未タ申込ヲ受ケタルコト無之奥国政府ニ於テモ自ラ進ンテ之ヲ發議シタルコトモ無之旨答ヘラレ候將又同氏ノ意見ニテハ本会ハ急ニ開会ノ運ヒニ至ルヘキ見込ナルヤ否ヤ相尋候処歐洲諸大國ニ於テハ目下軍備擴張最中ニ付今日ハ何分如此會議ヲ開ク為メ最良ノ時機トモ思ハレス因テ或ハ当分ノ中開会ノ運ヒニ至ラサルヤモ難計旨内話有之候間御参考迄右ノ趣不取敢第三号電信ヲ以テ及具申置候

右申進候 敬具

明治三十二年一月二十四日

白耳義国駐劄

特命全權公使 本野一郎（印）

外務大臣子爵 青木周藏閣下

四七 明治三十二年一月二十四日 独国駐劄井上公使ヨリ
青木外務大臣宛

軍備縮少案ニ関シ独乙側意向通知ノ件(二)

附屬書 新聞切抜訳

機密第貳号

三月七日接受

弭兵保和會議ノ議案ニ対スル当国政府ノ意向
並ニ新聞紙ノ論調ニ関スル件

去ル十六日發貴電ヲ以テ本月十一日露国外務大臣ヨリ各国
使臣ニ回附シタル弭兵保和會議ノ議案ニ対スル当国政府ノ
意向並ニ輿論ノ傾向取調ヘ報導可及旨ノ御訓令翌十七日接
手候処幸ニ當日ハ当国外務大臣ノ各国使臣ニ会见ノ當日ニ
付同大臣ニ面会ノ上其意向相槌メ候処同大臣ハ当国皇帝陛
下ハ先般帝國議會開院式ノ勅語中ニ演述セラレタル如ク露
国皇帝ノ提出セル博愛の計画ニ対シ忼忼同情ヲ表セラレ隨
テ独逸政府モ此美挙ノ実行ヲ助クルニ躊躇スル処ニ非サル
ハ論ヲ待タスト雖モ露国外務大臣ガ今回提示シタル議題ガ
果シテ實際的ニ施行セラレ得ルニ至ルハ頗ル困難ニシテ
内心疑心ヲ懷カサルヲ得ズ殊ニ諸大國ハ各其利害得失ヲ異
ニスルヲ以テ該提議ニ対シ之ガ満足ヲ与フルハ難事ニ可有
之旨ヲ答ヘ且今回提出ノ議題ハ独乙政府ニ於テ未タ深ク研

当国政府ガ事實ノ上ニ於テ露國ノ提案ニ多ク屬望致シ居ラ
サル点ハ是等ノ情態ニ依リ概要窺知ラルニ足ル事ト被存
候

會議ノ議題ニ対スル当國ノ輿論ハ一般ニ沈靜ニ有之前顯
Postノ短文ノ外ニハ一二ノ新聞紙ガ議題ノ大要ニ関スル
Timesノ報導ヲ転載シタルノミニ御座候蓋シ會議ノ性質
ニ対スル討究ハ当初露國ノ提案發表ノ時ニ當リ既ニ喋々致
居候ニ付今日ハ既ニ陳腐ノ問題ト相成而シテ今回ノ議題ノ
全文ハ政府ニ於テ未タ秘密ニ保存シ居ルガ故ニ未タ評論ノ
手段ヲ得サルニ基キ候モノト被存候

前顯外務大臣ノ意見並ニ本使ノ処見ノ大要ハ則日及電報候
得共玆ニ詳論及御報告候 敬具

明治三十二年一月廿四日

在独 特命全權公使 井上勝之助(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

(附屬書)

(切抜訳文「ポスト」紙一月廿二日附)

露國ノ軍備縮少ニ関スル提案

ムラウキエフ伯ハ軍備縮少會議ニ関スル第二回ノ書柬中今

第三章 軍縮第二回提案ト各国ノ意向 四八

究セサルヲ以テ豫メ之ニ対シ意見ヲ發表スルヲ得サルノミ
ナラズ今日未タ其時機ニ非サルヲ知ルガ故ニ当国政府ハ一
ニ之ヲ他日開会後ノ議事ニ譲リ其討究ニ任スル趣意ナル旨
ヲモ申聞ケ候查スルニ当国政府カ露国政府ノ提議ヲ以テ博
愛の事業トシテ十分ノ同情ヲ表シ候ハ当初ヨリ一定シタル
事ニ有之候モノノ如ク爾來數回ノ会见ニ際シ当国当局者
ガ本使ニ対シ常ニ此旨趣ヲ公言致候儀ハ前信屢及御報導候
次第ニ有之候処之ト同時ニ同會議ガ首尾克成立ノ運ニ至リ
提案ノ可決実行ニ至ル迄ニハ種々ノ困難アルヲ熟知致候
ガ故ニ該提議ニ対シテ確實ノ姿勢ヲ示シ若クハ何等主働的
行動ニ出候儀ハ当国政府ハ可相成之ヲ避ケ單ニ他強國ノ姿
勢ニ注視致居候様被存候殊ニ当初提案ノ發表以來各強國ハ
一ツモ軍備ノ縮少ヲ謀ルニ非ズ反而其擴張ヲ相競テ希画ス
ルノ事實アルノミナラズ露國自身ニ於テモ亦最近更ニ數艘
ノ軍艦ヲ新造シ遼東半島ノ防禦ヲ増加スルノ計画アルハ現
ニ当國ノ輿論ニ於テ深ク非難スル処ニ有之頃日当國ノ半官
報 Postニ於テモ別紙切抜ノ如ク一節ノ筆誅ヲ試ミ居候去
レバ当国政府ノ如キモ機ヲ見テ軍備ノ完成ヲ計画シ本年
度豫算ニ於テハ常備兵員貳萬六千人ヲ増加シ其費用トシテ
經常費ニ於テ式千八百萬麻ヲ要求致居候次第ニ有之候ニ付

日ニ至リ却テ軍備ヲ擴張増加スル所ノ國アルヲ慨歎シタル
由ノ近報アリ吾人ハ余リ之ヲ信セス而シテ露國自身ハ更ニ
著シク其ノ海軍ヲ擴張増加シ同國海軍省ハ鋼鉄艦三艘巡洋
艦三艘及水雷艇二艘以上ノ新艦ヲ製造セルヲ以テ吾人ノ會
テ疑惧シタル所ハ寧ロ今日實際ニ適シタルヲ知レリ
殊ニ「ペーテルスブルグ」政府ハ旅順口及遼東半島全部ノ
防備ヲ成ルヘク速ニ且ツ充分ニ完成セントシ千八百九十九
年度ノ東亞軍備擴張費トシテ五百萬「ルーブル」ノ豫算ヲ
立テタリ左レハ露國ハ自國ノ軍備ヲ縮少セントスルハ勿論
單ニ之ヲ懈怠セントスルノ意志タモ決シテ之ヲ有セサルコ
ト明白ナリトス

四八 明治三十二年一月二十五日 英国駐劄加藤公使ヨリ
青木外務大臣宛

軍備縮少案ニ関シ英国側意向通知ノ件(四)

公第十一号

三月三日接受

露国政府ヨリ發シタル軍備制限提案再度ノ回

章ニ関スル統報

本月十一日ヲ以テ露国政府ヨリ同國駐劄各国使節ニ交付シ

タル列国兵備ノ制限ニ関スル再度ノ回章ニ対スル当地輿論ノ傾向ハ不取敢同十七日付公第九号ヲ以テ大要及報告置候処同国政府ハ昨日ノ官報ヲ以テ右回章ヲ公ニシタル趣ニテ今朝当地各新聞紙ハ再ヒ之ニ対シ論評ヲ加ヘ居候何レモ前頭公信中申進候処ト大同小異ニ有之候ヘ共茲ニ御参考迄ニ其梗概ヲ抄訳シ供貴覽候

既ニ度々報告ニ及ヒタルカ如ク「タイムス」新聞ハ露帝ノ最初ノ提議ニ対シテハ帝ノ寛宏仁慈ナル希望ヲ賞讃スルト同時ニ其実際ニ行ハル可カラサルモノニアラサルヤ惜ミタリシガ其後ノ回章各国使臣ニ交付セラル、ニ及ヒテハ到底露帝希望ノ達セラレサルヘキコトヲ断言シ攻撃的口調ヲ用ヒタルニ今朝ニ至テハ更ニ進テ冷然嘲笑の調子ヲ以テ論評致居候而シテ先ツ其冒頭一片ノ敬意ヲ帝ニ払ヒテ曰ク再ヒ露政府ノ回章ニ接シテ誰カマタ寛宏優雅ナル露帝聖意アル所ヲ嘆称セサルモノアラシヤ帝ノ理想トセラル、一般ノ平和ハ主義ノ問題トシテモ亦感情ノ問題トシテモ若クハ生産社会死活ノ問題トシテモ之ヲ希望スルモノ宇内マタ我国ヨリ切ナルハナカルヘシ固ヨリ此ノ如キ考案ハ從來幾タヒモ提議セラレタリト雖モ未タ嘗テ何等成功ヲ見タルコトナシ縦シ露帝ノ提案ガ之等ヨリモ一層幸福

モ竊ニ惧ル各国ヲシテ軍備ノ必要ヲ確信セシメツツアル間ニ之ニ一定ノ制限ヲ設ケテ其範圍ヲ嚴守セシムルヲ得ルニ至ルノ日モ決シテ之ヨリ近カラサルヲ之レ畢竟人生ノ理想ニシテ変セサル間ハ一般ノ平和ハ空想ニ止ルガ故ニ思想ニ変化ヲ求メスシテ軍備ニ制限ヲ置カントスルハ空想ニモ値ラズト云フニ外ナラズ「タイムス」ハ更ニ進ンテ冷然タル嘲笑ヲ加テ曰ク

露帝ガ各国ノ軍備ヲ制限セントシテ歡慮ヲ腦マサルハト同時ニ露国ガ銳意熱心其海軍ヲ擴張シ其陸軍ヲ増加シ其兵略上ノ鉄道ヲ敷設スルノ事實アルハ吾人露国ノ為ニ甚ク之ヲ惜ム固ヨリ此一事敢テ露皇聖意ノ在ル所ニ対シ毫末ノ非議ヲ狭ムヲ容ルスモノニアラズ反テ帝モ亦世人ノ想フガ如キ無限ノ権力アル一天萬乗ノ君主ニアラズシテ自家軍國ノ大事ニ至テハ帝ガ寛宏仁慈ノ聖意モ亦之ヲ如何トモスルコト能ハサルヲ示スモノニアラズヤ

冷笑ノ調子ハ竿頭更ニ一步ヲ進メ遂ニ該提案ヲ以テ「ユーロピヤン」トナスノ断案ヲ下シテ曰ク

露国ハ何力故ニ其現ニ有スル強大ナル国防軍ヲ以テ全然満足スルコト能ハサル乎抑モ露西亜ノ国タル之ヲ攻撃スルニ難クマタ之ヲ攻撃シテ何等利益ヲ享クルノ国アルコ

ナル運命ニ遭遇スルコトナシトスルモ而カモ之ガ為メ帝ニ対スル一般嘆賞ノ念ハ何等増減セラルヘキニアラズ況ンヤ此提議ガ此種ノ理想ノ發達ニ最モ不利益ナル方面ヨリ来レルニ於テオヤ

ト之ヨリ今回ノ回章ガ平和ノ理想ニ種々ノ制限ヲ設ケタルヲ難シテ曰ク

軍備ヲ擴張スベカラサルコトヲ勧告スルハ之ガ全廢ヲ強ユルヨリ容易ナルガ故ニ今回ノ回章ニ於ケル制限ハ或ハ其実行ニツキ一種ノ強ミヲ与フルモノナリトナスモノアルヘシト雖モ何ゾ知ラン支離滅裂ノ理想ハ反テ之レ弱点ナルコトヲ、若シ回章云フ処ニシテ一般軍備ノ全廢ニアラシメバ之レ人生ノ理想界ニ与フルニ一新局面ヲ以テスルト同時ニマタ其実行界ニモ之ト対等ノ生面ヲ開クモノナルヘシト雖モ一方ニ於テ各国ヲシテ今日ニ現在スル軍備ヲ維持シ及ヒ軍備ナルモノ、目的ヲ遂行スルコトヲモ許シナガラ他方ニ於テ其増加ヲ防遏セントスルハ之豈ニ理想界ニ何等變更ヲモ与フルコトナクシテ独リ実行ニノミ節制ヲ求メントスルモノニアラサルナキヲ得ンヤ固ヨリ列国ガ其兵甲ノ使用ヲ全廢セントスルノ平和ナル方法ニ確信ヲ置クニ至ルノ日ハ前途尙ホ遙カナルヘシト雖

トナシ其野蛮ナル隣邦ト接触セル地角ヲ防衛スルガ為ニ相応ナル軍隊ヲ置クノ必要ヲ除キテハマタ何等廣大ナル兵備ヲ整フルノ要ナカルヘシ然ルニ露国ノ地勢此ノ如キニモ拘ハラズマタ其ノ兵備ノ為ニ其ノ財政ニ困難ヲ来スヘキニモ拘ハラズ將又皇帝ガ平和ノ為ニ歡慮ヲ腦マセラハ、ニモ拘ハラズ露国ハ現ニ大ニ其軍費ヲ増加シテ海陸共ニ宇内ノ牛耳ヲ握ラントス事已ニ此ノ如シ之豈ニ露帝ノ計画ガ抽象的ニハ贊美スヘキガ如ク實際ニハ全ク「ユーロピヤン」ナルヲ示スモノニアラサルナキヲ得ン哉之ヨリ提案ノ項目ニ亘リ論シテ曰ク

各国ガ正実ニ其軍費ヲ増加セサルノ約束ヲ遵奉スベキヤ否ハ如何ナル方法ニヨリテ確カメ得ベキ乎我英國ニ在テハ夫ノ露国本年ノ豫算ニ於ケルガ如ク隨意ニ引出シマタ充用シ得ベキ巨額ノ豫備金ノ存在スルナク且又一志一片ノ微ト雖モ尙ホ且ツ公然議會ノ協賛ヲ經ズンバ支出スルコト能ハサルガ故ニ稍ヤ此種ノ保證ヲ与ヘ得ベシト雖モ他何レノ国ニ於テカ勢力アル武人一派ガ軍費ノ為ニ窃ニ巨額ノ金員ヲ充用スルコトナシトノ保證ハ存在シ得ベキヤ此問題ノ發スルハ即チ此問ニ答フル所以ニシテ而シテ

此間ニ答フルハ自家牽制ノ詔勅ガ決シテ他ノ信用ヲ買フコト能ハサルヲ示スモノニアラサランヤ
ト述ヘテ提案第一項ヲ論駁シ去リ新規ノ爆発薬ヲ使用スルヲ禁止スルノ項ニ付テハ曰ク

見ズヤ仏国ハ現今海中水雷艇ノ製造ニ狂シツツアルニアラズヤ此種ノ水雷艇ニシテ露国回章ノ云フ処ノ如キモノナリトスルモ仏国ガ其使用ヲ止ムヘシトハ常識アル人誰カ之ヲ信ズヘキ若シ露国ノ提議ニシテ全然爆発物ノ使用ヲ禁止スヘシト云フニ在ラバマタ一考ノ価アルベシ然レトモ現在恐ルヘキ爆烈薬ノ使用ハ之ヲ許シナガラ單ニ其將來ノ新發明新改良ヲ禁スト云フガ如キハ仁愛ノ主義ニ於テ果シテ何ノ得ル処カアル聞クナラク露国ニ其新製銃砲ヲ軍隊ニ供給スルガ為メニマサニ巨額ノ金員ヲ支出セントス若シ此新發明ナカリセバ露国ノ財政或ハ多少ノ節減ヲナシ得タリシナラント雖モ而カモソレガ為ニ戦争ノ慘ニ寸毫ノ微ヲ減スヘシトモ思ハレズ若シソレ軍艦ノ製造ニ至テハ改良駿々トシテ日進月歩ノ勢ヲナス之レ或ハ機械術ノ未タ開ケサル国ニ取テハ恐クハ尠ナカラサル困難ナルヘシト雖モ現存ノ軍艦ヲ同一ノ模型ニシ若クハ列国檢艦ノ法ヲ設ケテ各国戰艦ノ検査ヲ為スコトヲ得ルトス

レバ該提案ヲ取テ之ヲ檢スルニ国政ノ料理ニ経歴アル老将英士ガ之ニ其指ヲ染メタルガ如キ跡ヲ見サレハナリ吾人ヲシテ直言スルヲ得セシメバ提案ノアルモノハ酷ハダ黄口書生ノ口吻ニ似タリト言ハサルヲ得ズ

ト極言シテ閣臣ノ猷賛至ラサリシヲ責メ回章中昨年八月初メテ提議ノアリタルヨリ爾來半年間ニ天下ノ形勢漸ク非ナシラトス云々ノ句アルヲ捕ヘ來テ平和ノ福音ヲ伝フルノ露国自ラ軍備ヲ張ラントスルノ撞着ヲ咎メ新規ノ火薬ヲ使用スルコトヲ禁スルハ恰モ新規ノ機關車ヲ鐵道ニ使用スルヲ禁セントスルカ如シ若シ人アリ改良の機關車ヲ發明センニ右ハ露国ノ鐵道ニ応用セラレ其軍隊及食糧ノ運搬ヲ更ニ容易ナラシムベキ恐レアリトテ之ガ使用ヲ禁スルコトノ実行シ得ベキヤヲ詰問シ海底水雷ノ使用ヲ禁スルハ露西亜ノ寵児タル仏国ニ大打撃ヲ加フルモノナリト冷笑シ而シテ提案第一一定ノ期間軍備ヲ増加セサル云々ノ項ニ付テハ即チ

之レ英國ニ於ケル平和論者ガ神聖休兵ト称スルモノニ外ナラズ然レトモ試ニ史書ヲ繙テ中世「神ノ休戦」ノ記事ニ至リ休戦了レルノ後戦争ノ数反テ前日ニ倍シタルノ事実ヲ見ズヤムラヴキエフ伯ノ所謂一定期間經過ノ後何人カ各国更ニ一層ノ元氣ヲ以テ兵備ヲ増スニ至ルコトナキ

ルモ仁愛ノ主義ハ之ガ為ニ秋毫ノ増減ヲ見サルナリ要スルニ新規ノ兵器彈藥ノ使用ヲ禁セントスルハ赤手大西洋ヲ回サントスルニ等シク到底実行スヘカラサルコトタルヲ免レズ縱シ或ハ実行セラレ得ベシトスルモ帝ノ仁愛ナル目的ハ之ガ為ニ寸毫モ成就セラレ得ベキニアラズ現今ノ勢ニ於テ平和ヲ維持スルニ至大ノ勢力アルモノハ兵器ノ改良進歩ト從テ増加シツツアル費用トニアルノミ吾人ハ此ニ断言ス恐ルヘキ兵器ノ行動ヲ充分ニ許シナガラ其使用ノ上ニ障碍ヲ置カントスルモノノ如キハ決シテ平和ノ友ト見ルコトヲ得サルナリト

以上ハ「タイムス」ノ所論ニシテ其攻撃的調子ハ更ニ前日ヨリモ甚シキヲ加ヘタルヲ覺申候「スタンダード」新聞亦似寄リタル批評ヲ下シ居候同紙ハ冒頭先ヅ

吾人ハ露帝ガ此議ヲ提出セラレタルノ聖意ニ對シテハ敢テ滿腔ノ賞讃ヲ愛シムモノニアラズト雖モ独リ悲ム閣臣輔弼ノ責ヲ尽クスニ於テ聊カ欠クル処アラサリシヤ露国モト之レ憲法政治ノ国ニアラズ帝ガ国政ヲ大臣ニ諮詢セラルト否トハ帝ノ自由ニアルヘシト雖モ而カモ今回章ニ對スルノ責任ハ大露帝國ノ堂々タル内閣中何レノ大臣ニ之ヲ負ハシムヘキヤ吾人竊ニ惑フモノナリ何トナ

ヲ保シ得ベキヤ若シ夫レ財政ノ狀態窮迫シタルノ時暫ク蜚バズ啼カズ他日一大飛躍ヲ試ミント欲スルノ国ニ取テハ此休戦ハ特殊ノ恩恵タラサランヤ

ト述ベテ一針ヲ露国ノ頂門ニ加ヘ露帝ノ希望ヲ達セントスル唯一ノ方法ハ攻撃ノ目的ヲ達スルコト能ハサルノ程度迄各国ノ軍備ヲ減スルニ在リ若シ露国ニシテ其試験ヲ為サントスレハ其隣国若クハ敵手ニ比シ遙ニ危險ヲ感スルコト少クシテ之ヲ実行スルヲ得ヘシト論シ提案第八仲裁ノ制ヲ採用スルコトニ付テハ「主義ニ於テ」用キラル、ノ外望アルベカラズトナシブラッセル條約項目ヲ修正シテ近時ノ戦争ニ適用シ得ベカラシムルコトハ其希望スル処ニシテジユネヅハ條約ヲ海陸共ニ適用スルハマタ為シ得ベカラザルコトニアラズトナシ尙此他國際會議ニ上ホスヘキ戰時ノ慣行等ニ關スル議題ハ多々アリト雖モ何レモ軍備撤廃トハ關係ナキノミナラズ寧ロ回章ニ所謂「國家政治上ノ關係」ナルモノニシテ之レ露国ガ國際會議ニ於テ討論ヲ避ケント欲スル処ノモノタリ若シ夫レ真ニ列国ノ衝突ヲ避ケ或ハ進テ軍備ノ縮少ヲモ行ハントセバ唯タ列国相互ノ讓歩ト協調トアルノミ幾多ノ國際會議ヲ開クモ何ノ得ル処力之アラント述ベテ

結論致候

以上兩新聞ト反対ノ主義ヲ有セル「デーリーニュース」ハ今回ノ回章ニ対シテハ前顯公信第九号中已ニ報告ニ及ヒタルト同様ノ旨意ヲ以テ簡單ニ歡迎ノ意ヲ述ヘタルニ過キズ候ニ付別ニ訳出不致候
右及報告候敬具

明治三十二年一月廿五日

在英 特命全權公使 加藤高明(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

註 新聞論說切抜省略

四九 明治三十二年一月二十六日

米國駐劄加藤公使ヨリ
青木外務大臣宛

前同伴(五)

機密第二号

三月三日接受

軍備縮少ニ関スル露國政府ノ新回章ニ付外務次官ト面晤ノ件

軍備縮少ニ付露國政府ノ新廻章ニ対スル当國輿論ノ傾向ハ去ル十七日電報第二号並ニ同日付公第九号ヲ以テ報告致候通りニ有之当國政府ノ之ニ対スル態度ハ直ニ確定ノ運ニ至ル間數ト存候ヘ共去ル十六日態々電報ヲ以テ御問合セノ次

ハ思掛ケス但シ事ノ性質上會議ニ參同スルコトヲ拒ムノ理由ナクレハ結局議題ニ関スル意見ハ留保ノ上之ニ會同スヘキ旨ヲ回答スルコトナランカト相察候

英國政府ニテハ右ノ通り未タ態度ノ確定シタルモノ無之候ヘ共右談話ノ要領不取敢別紙寫ノ通り去ル廿日及發電候次第ニ有之候猶其ノ内ニハ當國政府ノ意見モ確定可致ニ付聞込次第重ネテ可及報告候

右別紙相添及具申候敬具

明治年三十二年一月廿六日

在英 特命全權公使 加藤高明(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

註 別紙省略

五〇 明治三十二年一月二十六日

米國駐劄小村公使ヨリ
青木外務大臣宛(電報)

軍備縮少案ニ関シ米國政府意向通知ノ件

一月二十六日發
二十八日着

青木外務大臣

在米 小村全權公使

第四号

露國回章ノ件ニ係ル貴電ニ関シ國務卿ノ語ル所ニ依レハ米

第モ有之候ニ付去ル十九日外務省ニ至リ外務次官サンダーソン氏ニ面會シ英國政府ノ意嚮ヲ叩キシニ外務省ニテハ漸ク去ル十六日此廻章ニ接セシ迄ニテ未タ何等意見ヲ決定スルニ至ラストノコトニ有之露國外務大臣ハ本廻章ヲ英大使ニ交付スルニ當リ該議題ハ注文ニ応シ鬼ニ角之ヲ廻章ニ列記セシモ(蓋シ皇帝ノ命令默シ難ク玆ニ出テタルモノカ)中ニハ露國政府ニテモ同意シ難キモノアリト云ヒシ趣ニ有之候本使ハ又同次官ニ対シ會議ノ成立ニ関シ露國政府ノ回章ハ之ヲ二様ニ解釈シ得ルモノノ如ク即チ諸議題ハ同會議ニ之ヲ提出スルニ付豫メ各國政府ノ之ニ対スル意見ヲ承知シタシト云フニモ解釈セラレ又右議題ヲ基礎トシテ會議ヲ開ク積ナレトモ諸國政府ニテ始メヨリ議題ニ不同意トアレハ更ニ考慮スルコトアルヘシ即チ各國政府ノ意見次第ニテハ或ル會議ヲ開クコトナカルヘシト推測スルコトモ得ヘク廻章ノ文字頗ル明瞭ヲ欠クモノノ如シ英國政府ハ之ヲ如何ニ觀察シ居ルヤヲ尋ネシニ右ハ稍々曖昧ナレトモ畢竟各政府ノ見込ニテハ或ハ細目ニ涉リ意見ヲ述フルモ或ハ簡單ニ會議參列ノ諸否ヲ答フルモ可ナルヘクト思考スト申居候同日次官ノ口氣ヨリ察スルモ又ハ當國輿論ノ傾向ニ徴スルモ當國政府ニ於テハ露帝ノ提議力有効ノ結果ヲ生スベシト

國ハ目下ノ事情別ニ平和會議ヘ其委員ヲ派遣スルヲ止ムヘキ理由ヲ見スト雖モ兵器ノ改良ニ制限ヲ加フルカ如キ何等ノ提議ニモ同意ヲ表スルコト能ハサルヘシト云フ、時期到ラハ歐洲ニ駐在スル大使ノ中老名該委員ニ任命セラルヘシ、本件ニ関スル當國ノ輿論ハ極メテ冷淡ナリ

五一 明治三十二年一月二十六日

仏國駐劄栗野公使ヨリ
青木外務大臣宛

軍備縮少案ニ関シ仏國側意向通知ノ件(二)

機密第五号

三月三日接受

本年一月十六日附第四号電報ヲ以テ露國外務大臣ヨリ發シタル萬國平和會議提議ニ対スル仏國政府ノ意嚮及輿論ノ趨勢報告可致旨御訓示ニ付不取敢同月十九日附第四号電報ヲ以テ大要及具報置候抑モ當國ニ於テハ露國トハ特別ノ關係モ有之反對ノ態度ヲ執ルベキ筈モ無之且ツ本官是迄度々當國外務大臣トノ談話ノ模様ニ依ルモ仏國ハ何時ニテモ露國ノ提議ニ応シ平和會議ニ參同スルニ於テ少シモ躊躇セザルコトハ明白ノ事實ニ有之候尤モ過日露國外務大臣ヨリ提出シタル平和會議案中ノ或ル箇條ニ対シテハ多少異見ノ存

スルモノ有之哉ニ承知致候得共右ハ討議上ノ問題ニ屬スルモノニシテ今回ノ提議ニ屬スル豫議會議又平和會議開設ニ對シテハ何等影響スルモノニハ無之候又昨日下午院ニ於ケル当国外務大臣ノ演説ニモ世界ノ平和ヲ以テ其方針ト為スカ故ニ露國ノ提議ニハ無論賛成ヲ表スル旨演ベラレタル処議員ハ拍手ヲ以テ之ヲ迎ヘ其他議院ニ於テモ特ニ賛成ヲ表スルノ処置ヲ取リタル状況ニ有之候又新聞紙上ニ於テハ今回露國ノ提議ニ對シ論評スルモノ少ク只当国外務省ノ機関ト称セラル、所ノ「ル、タン」ニ於テ一片ノ社説ヲ掲ケ大賛成ノ意ヲ表シタリ（其執筆者ハ前外務大臣「アノトー」氏ナリトノ評アリ）其詳細ハ別紙切抜ニテ御了承相成度候右之外別ニ見ルベキ議論モ無之候得共畢竟スルニ仏國輿論ノ趨勢ハ露國ノ提議ニ對シ同情ヲ表スルモノニ有之候右及具報候 敬具

明治三十二年一月二十六日

在仏國 特命全權公使 栗野慎一郎（印）

外務大臣子爵 青木周藏殿

註 別紙切抜省略

本月十六日東京發電ヲ以テ今般露國政府ノ提案ニ係ル平和會議ノ要目ニ関シ塙國政府ノ意向並輿論ノ傾向ヲ具報候様御訓示有之候処當時右ノ提案ハ未タ世間ニハ傳播不致隨テ當國ノ新聞紙上ニハ其概要ヲモ記載スルモノ無之候得共十七日ニハ林公使ヨリ右提案ノ寫ヲ送來候ニ付翌十八日外務大臣ニ面會シテ本件ニ話及致候処當國政府ニ於テモ前日右ノ提案ヲ落手セル趣ニテ同大臣ハ之ヲ一読セル迄ニ有之未タ稽査ノ間合無之ニ付何等ノ意見ヲモ陳述スル能ハス候得共該提案ハ數日前露政府ヨリ提出セルモノト殆ト同一ニシテ格別ノ差異無之唯會議ハ諸大國ノ首都ニハ開設セサル事ニ相成居ル旨ヲ陳述相成同大臣ハ別ニ細目ニ涉リタルノ言説無之候得共其口氣ヲ察スレバ其大体ニ関スル意向ハ客歲八月第一回ノ提議ニ對スルモノト略同一ナラント被存候依テ尙ホ會議開設ニ関スル意見ヲモ問合候処詰リ相當ノ代表者ヲ派出シテ參列スル丈ノ事ハ中心ニ決定致居候様被察候詰リ當國ト露國トノ關係上出來得ル丈ハ露國ヲソラサ、ル丈ノ処置ヲ為ス事ハ必要ナルヲ以テ會議ノ結果如何ニ関セス參列スルノ意向ナラント存候儀ニ有之候

第二 重要ノ新聞沈黙シ雜報新聞批評ノ事

此日外務省機関新聞フレムデン・ブラットハ龍動ノ通信ト

五二 明治三十二年一月二十九日

塙國駐劄高平公使ヨリ
青木外務大臣宛（電報）

軍備縮少案ニ関シ塙國側意向通知ノ件（二）

一月二十九日發
〃 三十一日着

青木外務大臣

在塙 高平特命全權公使

第五号

本官電信第四号ニ関シ塙國外務次官ハ于今其意見ヲ確定セス然レトモ同官ハ露國皇帝ガ平和會議ヲ招集セントスルノ善意ヲ抱カル、際ニ方リ露國ガ自ラ熱心ニ其軍隊ヲ擴張シツツアルハ驚愕ノ外ナキ旨ヲ述ヘ又當國ニ於テハ本問題ニ関シ政府ノ各部ヘ照會セサルヲ得サルヲ以テ其意見ヲ發表スルハ急速ノ運ビニ至ラサルヘシト言ヘリ

五三 明治三十二年一月三十一日

塙國駐劄高平公使ヨリ
青木外務大臣宛

前同件（三）

機密第二号

三月十一日接受

露國提案平和會議要目ニ関スル塙國意向ノ事

第一 外務大臣ト面晤ノ件

稱シテ會議案ノ要目ヲ略載致候得共何等ノ論說ヲモ相掲不申翌十九日ヨリ廿日ニ涉リ政治上ノ勢力ヲ有セサル雜報新聞中批評ヲ試ムルモノ一二有之其趣意ハ種々有之候得共目下露國ニ於テハ西伯利亞鐵道ノ建築、財政ノ整理及經濟ノ固定ノ為メ平和ヲ必要トスル時期ニ在ルヲ以テ此際露帝ノ仁愛的意志ノ實行ヲ謀ルハ其意思ノ真偽ヲ疑ハシムルノ虞アルニ付時期ヲ得タルモノニアラズト云フカ如キ又露國ヲ始トシ英仏等ノ諸大國ニ於テ最モ臧黙シテ最モ熱心ニ軍備ヲ整備スルノ時ニ於テ平和會議ヲ開設セントスルハ時期ヲ誤リタルモノト云フカ如キ冷評的論說ニ有之其新聞ノ性質ヨリ見レハ格別ノ価値有之モノト不被存候ヘ共政府機関其他重要ノ新聞然然睥睨スルノ時ニ於テ僅カニ雜報新聞カ先鋒トナリテ冷評ヲ下セルハ即チ該提案ノ當國ニ歡迎セラレサルノ一現象ナラン乎ト被存候次第ニ有之候

第三 軍事機関ノ論說

如此事情ノ時ニ於テ前内閣ノ時代迄塙政府ノ補助金ヲ領取シ今日ニ於テモ軍事社会ノ機関ト目セラレ候「ライヒス・ウエール」ナル新聞ハ本月中旬頃ヨリ數々塙國軍備ノ小弱ナルヲ慨歎シ露國ノ近年軍備ヲ擴張スルノ景況ヲ説題シ露國ハ歐洲ニ對シ平和案ノ提出者タルニ於テハ自ら率先シテ

自國ノ軍費ヲ削減シテ他國ノ為ニ先例ヲ示スコト当然ナレトモ現今露國ノ陸海軍費ハ現在ノ事情ニ応シテ増額ヲ得ヘキ最高点ニ達シ新式ノ武裝ヲ整備スルニ至リタレハ他國ニ対シ新武器ノ採用ト軍費ノ増加ヲ禁止スルノ約定ヲ提議スルモ毫モ顧慮スヘキ事ナシト論シタルハ当國軍人ノ意想ヲ代表シタルモノニシテ最モ注意ヲ為スヘキ要點ト存候義ニ有之候

第四 外務次官ト面晤ノ事

拙官ハ尙ホ外務次官ノ時ニ澹泊ニ政治問題ヲ論説スルコトアルヲ知ルヲ以テ去月廿日同官ヲ訪問シ其意見ヲモ相尋ネ候処今回ハ同官甚タ沈黙ニシテ未タ露國ノ提案ヲ一読セサルヲ口実トシテ拙官ノ疑問ヲ逃避セントスルノ模様有之候間拙官ハ我國カ政治舞台ノ中心ヨリ遠隔スト雖トモ宇内ノ平和ヲ進捗スルノ目的及手段ニ関シ可成丈ケ諸大國ト共ニ合力運動スルハ其希望スル所ナルニ付貴政府ノ意向ヲモ了知スルコト必要ナル旨ヲ申聞ケ候処次官ハ次回ノ会见ヲ以テ所見ヲ陳述スヘキ旨ヲ明言相成候右ノ次第ニテ当日マテ觀察ノ結果ハ甚タ不充分ニ有之候ヘ共去廿二日ヲ以テ第四号電信ヲ發シ其概略ヲ具報致候次第ニ有之候

上ノ差異ハ即チ本件ノ討議ニ関シ至大ノ勢力ヲ有スル所ナルヘシ云々而シテ選拔的仲裁及調停等ノ事ニ付テハ「フレムデン・ブラット」ハ其実行ノ難カラサルヲ論シタリ右ノ外「ノウエ・フライ、プレス」等ノ如キ主要ノ新聞モ殆ント同時ニ本件ニ関スル論説ヲ掲載セシモ概ネ懷疑的ノ意見ヲ概説スルニ過キズシテ外務省機關新聞ノ如ク其項目ニ関シ分折的ノ批評ヲナスモノ無之候

第六 外務次官ト再会晤ノ件

従来外務省機關新聞ハ外交問題ニ関シテハ殊ニ慎重ノ態度ヲ守リ容易ニ論説ヲ發セス而シテ其言動共ニ外務省ノ意思ヲ代表スルヲ以テ其主眼トスルモノノ如ク有之候ニ付テハ前記ノ論説モ或ハ同省ノ意見ヲ承迎シタルモノナラント相察候ヘ共尙前約ニ依リ去ル廿七日ヲ以テ外務次官ヲ訪問致候処同官ハ矢張沈着シテ多言不致候ヘ共近來露國ニ於テ陸海軍ノ擴張ヲ計画シ其実行ニ汲々タルノ時ニ於テ他國ノ如キ隣邦ヲシテ軍備ヲ減縮セシムル等ノ事ハ無理ノ注文ニ有之貴國モ同感ナラントノ一話有之候得共露國提案ノ細目ニ関シテハ事政府ノ各局部ニ關係スルヲ以テ容易ニ意見ヲ一定難致旨ヲモ陳説相成候依テ右次官トノ会见ノ概略並機關新聞等ノ論説ハ去廿九日第五号電報ニテ具報致置候次第

第五 外務省機關新聞遂ニ露案ヲ評論スル事

夫ヨリ三日ヲ越テ去廿五日ニ至リ外務省機關新聞フレムデン・ブラットハ一面ニハ露都ノ通信ト称シテ平和會議要目ノ全文ヲ転載シ一面ニハ其論説ヲ掲記致候其大要ニ曰ク該要目八項ノ中第一項及第八項ハ露帝ノ發題ニ対シ其新奇ニシテ且大胆ナル性質ヲ附与スルモノニシテ其他ノ項目ハゼネウワ條約ヲ敷衍シ其規定ノ趣旨ヲ海戰ニ推及セントスルモノナリ若シ該要目中右等ノ項目ノミニテモ実行スルヲ得タランニハ人道ノ為メ大勝利ト云フヲ得ヘシ然ルニ第一項及第八項ハ實際新奇ノ發題ナルヲ以テ會議開設前豫メ各國間ノ意見ヲ交換セサルヘカラス而シテ若シ此等ノ要點ニ関シ諸大國ノ意見ニ根本的ノ差異アルニ於テハ會議ニ於テ之ヲ論議スルノ必要ナシ故ニ其ノ場合ニ於テハ豫メ會議ノ要目ヲ制限シテ「ゼネウワ」條約ヲ完成スルノ一事ニ止メシムルヲ是トス又仮令各國ノ態度ニ於テ右等ノ要點及第八項ハシテ討議スルヲ許スモノトスルモ其討議ノ区域ヲ立ルコト必要ナルヘシ畢竟軍備制限ノ事ハ重要ノ難件ナレハ露帝ノ高尙ナル希望カ最モ嚴酷ナル試験ニ付セラル、モ此事件ニ在ルヘシ而シテ各國間ニ於ケル政治上物質上及制度

ニ有之候要之露國提案中ニハ各國各自又ハ共同シテ熟議ノ上豫メ會議ニ付スヘキモノト付スヘカラサルモノト別スルノ必要モ可有之其為ニハ當國ノ如ク僅ニ應拠的要素 (facteur de renforcement) ノ位置ニ在ルノ因柄ニ於テ容易ニ獨立的意思ヲ發表スル能ハサル事情有之儀ト存候得共尙今後觀察候次第ハ追々具報可致候
右申進候 敬具

明治三十二年一月三十一日

特命全權公使 高平小五郎 (印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

追テ本文記載ノフレムデンブラット新聞切抜為

念差進候也

註 新聞切抜省略

五四 明治三十二年二月四日

伊國駐劄牧野公使ヨリ
青木外務大臣宛 (電報)

軍備縮少案ニ関シ伊國側意向通知ノ件 (一)

二月四日發
〃七日着

青木外務大臣

在伊 牧野特命全權公使

第二号

軍備縮少ニ係ル第二回ノ露国回章ニ関シ伊国外務大臣ノ本官へ語ル所ニ依レハ該回章ハ目下陸海軍両大臣ノ審査中ニ係リ当局官庁ノ意見決定次第公然ノ回答ヲ殆スヘシト云フ尙同大臣ハ平和會議ハ多分開会セラルヘシト雖モ該問題ノ困難ニシテ且ツ複雑ナルカ為メ到底格別ノ結果ヲ見ルコトナカルヘシト言ヘリ

五五 明治三十二年二月七日

伊国駐劄牧野公使ヨリ
青木外務大臣宛

前同伴(二)

公第十号

三月十四日接受

平和會議ニ関スル露帝第二ノ提案一度世上ニ發布セラレテ以来欧州ノ諸新聞紙ハ何レモ論難陳弁スル処有之左ニ其一ニヲ訳出致候其社説中法王廷カ其代表者ヲ此會議ニ派遣セントスルノ議ニ関シ宗教新聞ト他新聞紙トノ間ニ一大衝突ヲ來シ連日論撃致居リ候カ如キハ其特色ニ可有之候
半官報ボ・ロ、ロマノ新聞ハ去月廿六日ノ紙上ニ於テ論シテ曰ク

次ニボ・ロ、ロマノ新聞ハ本月一日法王及會議ナル問題ヲ掲ケテ曰ク

法王廷カ平和會議ニ案内セラレタルカ若シ果シテ然リトセハ伊国ハ之ニ反抗セサル可ラサルカ

法王廷ノ此會議ニ代表セラル可キヤ否ヤハ提案者露政府ノ意志ニ屬シ吾人ノ知ル処ニアラズ然レトモ吾人ノ聞ク処及宗教機關新聞ノ態度ヲ見ルニ未タ其事ナキモノノ如シ

レオ十三世ハ固ヨリ伊太利王国ニ對スル政治的深意ヲ有セズシテ此會議ニ列セントヲ欲シ得ルヤ明ナリ

二億三千五百万ノ信徒中欧州ニアルモノ一億五千六百万ニ達ス其首長トシテ平和會議ノ成効ヲ望ム固ヨリ其分ナリ

若シ法王廷カ此會議ノ案内ニ接セサルカ蓋シ實際問題ニ関与スヘキノ実力ナケレハナリ長戦ヲ横フ四名ノ瑞西兵ト鍵ヲ司トル三名ノ憲兵トハ未ダ以テ軍備縮少ノ問題ニ容喙スルノ要ヲ見サレハナリ

伊国々王ウムベルトカ實質的及道義的ニ其代表者ヲ派シテ外交上ノ威厳ヲ完全ニ保維ス可キ勿論ナレハ敢テ法王

曩ニデボンシヤイア卿ノ宣言アリ三帝室友交ノ応酬アリ仏國議會ニ於テ外交政策ノ討議アリテ以来欧州政治社会一般ノ状態ハ実ニ今日ヲ以テ此最大困難ノ問題ヲ議スルニ尤好恰ナル時機タルヲ示セリ

彼ノ軍備ヲ擴張セサル可シトノ約束又ハ軍費ヲ減縮セントノ問題ノ如キハ固ヨリ今日ニ於テ決シ得可キノ事項ニアラス矧ンヤ独乙ノ如キハ新ニ三軍団ヲ増設セントスルノ計画アルニ於テヤ然レトモ科学ノ進歩ト共ニ日ニ精銳ニ赴ケル武器使用ノ制限又ハ軍事衛生ニ関スル同盟ノ如キハ各国間ノ同意ヲ得ン事吾人ノ疑ハサル処ナリ、水雷ノ使用又ハ仏海軍ニ於ケル水中電池又ハ塹海軍ニ於ケル光壕器ノ如キ其研究ノ今日ニ當リ須ラク之ヲ廢棄ニ付セシムル等之ナリ然ラサレハ他日又如何ニ狂暴ナル武器ノ出シモ知ル可ラズ而シテ武器使用ノ制限ハ列國間利害ノ衝突ス可キ問題ニアラサレハナリ

然シテ此平和會議ノ功ヲシテ完カラシメンニハ須ラク先ツ列國間政治的關係及條約ノ効果タル原状ニ関スル問題一切ヲ排除スルコトノ必要ナルハ吾人ノ信シテ疑ハサル処ナリ

カ更ラニ代表者ヲ派セントスルカ如キ徒ラニ蛇足ヲ添ユルノ類ノミ

右ノ一篇ハ広ク欧州ノ新聞紙ニ転載セラレテ伊国政府及人民ノ意嚮ヲ表スルモノトシテ唱道セラレタリ

其後宗教反對ノ新聞紙カ法王廷ハ其代表者ヲ出サシム可ラズ政府ハ内政保維ノ為メ極力之ヲ妨害ス可シト痛論スルモノ輩出セルヨリボ・ロ、ロマノ新聞ハ本月七日ノ紙上ニ於テ弁シテ曰ク

已ニ法王廷ハ其代表機關ヲ列國ニ有シ列國又其代表者ヲ法王廷ニ駐劄セシムルノ今日ニ於テ法王廷カ萬國平和會議ニ案内セラレタリトテ伊国ハ何等ノ痛痒ヲ感セサル可シ

若シ法王ノ代表者カ列席スルヲ以テ吾人ハ會議ニ参与セストセハ露国ハ言ハシ強テ列席ヲ乞ハサル可シト而シテ伊国ハ袖手傍觀スルノ愚ヲ學ハサル可ラズ

ト論シ本件ニ関シ猥リニ喋々スルノ不可ヲ説キ更ニ言ヲナシテ曰ク

仏ルタン新聞ハ云ヘリ試ミニ法王廷カ代表者ヲ出ストスルモ之レ単ニ有名無実ノ事ノミ軍備縮少其他ノ實際問題ニ関シ是非スルノ資格ナケレハナリト真ニ然リ法王廷ノ

代表者ヲ派スヤ固ヨリ露帝ノ一意ニ存ス然レトモ昨日ニ至ルマテ未タ案内ノ發セラレタルヲ聞カス從ツテ政府ハ故障ヲ申込ミタルノ夢ハ未タ見サルナルヘシ云々
次ニトリブナ新聞ハ本月四日ヲ以テ論シテ曰ク

宣戰譚和ノ能力ナク擴張ス可ク又減縮ス可キ軍備ヲ有セサル法王カ代表者ヲ此會議ニ出スノ理由何レニカ存ス彼ノ日本ノ進歩ト共ニ消滅ニ帰シタル大君ト御門トノ關係ヲ吾人ノ聞ニ見ルハ伊国政治家ノ名譽威信ニ關スルコトト云ハサル可ラス云々

右及具報候 敬具

明治三十二年二月七日

在伊 特命全權公使 牧野伸顯(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

五六 明治三十二年二月七日 伊国駐劄牧野公使ヨリ
青木外務大臣宛

前同伴(三)

機密第二号

三月十四日接受

軍備制限其他ニ付伊国外務大臣ノ談話

微少ニシテ寧ロ失望ニ帰セン而已或ハ第一條ノ仲裁々判ノ方便ノ如キ從來學者ノ主唱シテ止マサルニ拘ハラズ今日ニ至リ遂ニ一種ノ提議タルニ過キサルモノ畢竟其獨立國ノ最貴重スル主權ヲ束縛スルノ嫌アルヲ以テナリ今回トモ此事情依然現存スルヲ以テ其成法トナルハ到底期ス可ラサルベシ唯僅ニ数項ノ論断ヲ下スカ如キコトハ之レアラン其他ゼネーヴ、ブルックセル、コンヴェンション、ノ如キ枝葉問題ニテハ協議ノ繼ルコト全ク之ナシト云フヲ得ザルベシ

要スルニ露帝ノ提議ハ頗ル美麗ナルモノ之ヲ実行スルノ手段ニ就テハ深ク講究ヲ遂ケサリシモノト云ハサル可ラス云々又東洋ノ現状ニ話及シテ曰ク日本ハ英國ト親密ナリ此ハ得策ナルベシ露國ハ近來少シク沈着ノ態度ヲ取ルモノノ如シ此ハ昨年中余マリ急激ニ遣リ過キタルカ為メ専ラ英國ノ感情ヲ害シタル形跡ヲ呈シ其不得策ナルヲ覺知シ今ハ唯「シベリ」鐵道ノ落成貫通ヲ待ツモノノ如シ此鐵道成ルノ日ハ東洋事アルノ時ナルベシ或ハ終ニ戰爭トナランモ難計其時ハ日本ハ必ス何レトカ組ミスルニ至ルベシ今ヤ日本ノ盛シニ軍備ヲ整ヘツツアルハ至極必要ナルベシ
外務大臣第二段ノ談話ハ固ヨリ偶然話次之ニ及ヒタルモノ

本件ニ關シ提議者ハ去年十二月卅日ヲ以テ第二回ノ廻狀ヲ發シテ以來此問題ハ再ヒ一般ノ注意ヲ喚起シ各新聞雜誌等ハ何レモ区々ノ所見ヲ掲載シ更ラニ一層ノ活氣ヲ放ツニ到リタリ伊国政府ハ最初ヨリ好意ヲ表シ可成ク露帝盛意ヲ助ケ以テ收メ得可キ丈ケノ結果ヲ獲得スルノ希望ヲ抱キタルハ其露政府ニ對スル第一回答ノ主意當時当局者ノ談話及伊国經濟上ノ実況ヨリ推考スルモ容易ニ推測スルヲ得タル次第ナリ然ルニ第二回ノ廻狀ノムラヴィフ伯ノ名ニ於テ散布セラル、ヤ其列叙セル條目ノ多クハ有触レタル事項ニシテ其架空的ノ性質ヲ顯ハスヤ却ツテ該問題ノ困難ヲ露出シタルノ感ヲ起セリ此際伊国政府ノ態度ハ如何ト相考ヘ外務大臣ニ就キ親シク談話ニ及ヒ候処其洩ス処大要左ノ如ク有之候

外務大臣ハ曰ク第二回ノ廻狀ハ性質上陸海軍兩大臣所管ノ事務ニ關係スル処深キヲ以テ目下兩大臣ノ調査中ニアリ其復申ヲ待テ政府ハ公然回答スル見込ナリ各国中已ニ表面或ハ口上ニテ贊同ノ意ヲ露政府ニ通知シタル向キモアリ而シテ会場ハ和蘭ノ首府ハーグニ指定スルニ至ラン然レトモ未タ確定シタルニ非ラス其結着ノ如何ニ就テハ固ヨリ豫言スル甚タ難シト雖其目的ノ光明盛大ナルニ比シテハ得ル処

ニシテ深キ意味アルコトニモ無之候得共其東洋形勢ノ大体ニ注意スルノ一班ヲ示スモノト存候間御參考迄ニ申添候
右及具報候 敬具

明治卅二年二月七日

在伊 特命全權公使 牧野伸顯(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

五七 明治三十二年二月九日 英國駐劄加藤公使ヨリ
青木外務大臣宛(電報)

軍備縮少案ニ關シ英國側意向通知ノ件(六)

二月九日發
十日着

青木外務大臣 在英 加藤全權公使

第九号

英國議會ハ二月七日ヲ以テ開會セラル英國皇帝ノ勅語中英國政府ハ露國皇帝ノ發議ニ係ル平和會議ニ參列セントノ意思ヲ表明シタル旨ヲ述ベラレタリ之ニ對シ「ソールスベリ」候ヘ左ノ如ク説明ヲ為セリ即チ何人ニテモ露國皇帝ノ希望ガ実行セラルベキコトヲ希望セサルモノナシト雖モ之ニハ多クノ困難ヲ排去セサルヘカラス若シ會議ノ結果ニシテ仲裁ノ原則ヲ擴張シ開戰ノ時ハ戰爭ニ伴フ悲惨ヲ減少スル

コトナルニ於テハ侯自ラ満足スル所ナリ然レトモ英国ハ他国ノ例ニ倣ハサルヘカラス而シテ平和ヲ保持スル為メ汲々努ムルト同時ニ戦時ノ準備ヲ決シテ怠ルヘカラスト言ヘリ当議會ハ格別ノ事件ナキ見込ナリ

五八 明治三十二年三月二十日 英国駐劄加藤公使ヨリ
青木外務大臣宛

軍備縮少提議ニ関スル露国第二回章ニ対スル英
国回答振通知ノ件

附屬書 二月二十日付英外務次官来翰写

機密第九号 四月八日接受

軍備縮少ニ付露国政府第二ノ廻章ニ対スル当国政府ノ回答振ハ先月廿六日付機密第二号並ニ去ル十六日付機密第八号ヲ以テ申進候処本日同伴ニ付外務次官サンダーソン氏ハ兼テ本使ヨリ依頼致置候次第モ有之候ニ付別紙写ノ通り文通致具候即チ当国政府ハ去ル十五日ヲ以テ右第二ノ廻章ニ対シ回答ヲ發セシ趣ニテ其趣意ハ前兩信ヲ以テ報告及候通り同廻章ニ記載セラレタル議題ニ対シテハ別ニ意見ヲ表白セス單ニ軍備縮少ヲ論スヘキ會議ニハ參同スヘキ旨ヲ答ヘ列國ノ紛議ヲ可成調停又ハ仲裁ノ方法ニヨリ決定スル件ハ素

ヨリ異存ナキノミナラス当国政府ハ屢々其意見ヲ宣言セシ旨ヲ確實ニシ蘭国海牙ニ於テ該會議ヲ開ク事ニ対シテモ何等異議ナキ旨ヲ附加シタルモノニ有之候

右回答ノ趣意ハ既ニ電報第四号並ニ第十号ヲ以テ及具申候次第ト同様ニ有之且可成調停又ハ仲裁ノ方法ヲ以テ戦乱ヲ避ケントスルノ意ハ英国政府屢々之ヲ公ニシベネツエラ境界事件ノ如キ或ハ英米仲裁條約ノ如キ充分英国ノ意思ヲ發表スルニ足ルモノニシテ今回始メテ之ヲ宣言シタルモノニアラサレハ右回答ノ趣ハ態々電報スルノ価値無之ト存候間本信ヲ以テ茲ニ右及具申候敬具

明治三十二年二月二十一日

在英 特命全權公使 加藤高明(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

(附屬書)

二月二十日附英国外務次官来翰写

Foreign Office,

February 20th 1899.

Dear Mr. Kato,

With reference to the enquiry you made some days ago, Lord Salisbury desires me to say that the answer of Her Majesty's Government to Count Mouravieff's

second circular on the proposed conference on armaments was despatched last Wednesday.

It contains a general acceptance in principle of Count Mouravieff's proposals while abstaining from expressing any definite opinion upon the eight points enumerated by Count Mouravieff as proper subjects for discussion. As regards the eighth of those points, however, the desire of Her Majesty's Government to promote by all possible means the principle of recourse to mediation and arbitration for the prevention of war is well known and has been frequently declared. Her Majesty's Government have also accepted the proposal that the Hague shall be the place of meeting.

Believe me,

Yours sincerely

T. H. Sanderson.

五九 明治三十二年三月二十日 堀口駐蘭臨時代理公使ヨリ
青木外務大臣宛(電報)

平和會議開催日取情報ノ件

二月廿一日發
廿三日着

青木外務大臣

在蘭 堀口臨時代理公使

第七号

蘭国外務大臣ノ私見ニテハ平和會議ノ開会ハ五月ナルヘシト云フ

六〇 明治三十二年三月十日 堀口駐蘭臨時代理公使ヨリ
青木外務大臣宛(電報)

平和會議開催期日決定ノ件

三月 十日發
十一日着

青木外務大臣

在蘭 堀口臨時代理公使

第拾号

平和會議開催ノ期日ハ五月十八日ト決定シ蘭国政府ハ不日各外国政府ハ招待状ヲ發スベシ

六一 明治三十二年三月七日 山本海軍大臣ヨリ
山県總理大臣宛

軍備縮少會議議題ニ関シ海軍側意向通知ニ関スル件

附屬書一 平和會議ニ対スル解釈及意見

二 軍備縮少會議議題ニ関シ我海軍

側意向(一)

三 同伴(二)

海軍大臣機密第四七号
臣官房

露國提議ニ係ル萬国平和會議議題ニ関シ別紙解釈及意見提出候間其筋ノ調査ニ附セラレ度此段稟申候也

明治三十二年三月十七日

海軍大臣 山本権兵衛(印)

内閣総理大臣侯爵 山県有朋殿

追テ海軍ヨリ派遣セラルヘキ委員ヘノ訓令案及附屬書類等別冊トシテ添附候也

△欄外朱記
總理ヨリ外務大臣ニ手交セラレタルモノ

(附屬書一)

平和會議ニ対スル解釈及意見

露國ノ萬国平和會議ナルモノヲ提起セル真意ハ暫ク措テ論セス仮リニ各国政府ニシテ真ニ人文ノ發達ヲ希ヒ互ニ協同シテ民力ノ休養ヲ欲スルモノトセハ現今我國情ニ於テ其大

原則トシテ提案ノ意ニ反對スルノ理由ヲ見ズト雖モ如何ナル場合ニ論ナク自衛ニ必要ト認ムル所ノ兵備ノ程度以下ニ削減スルコトヲ容ルサス而シテ本問題モ亦列國ノ全会一致ニ非ルヨリハ協定ノ効果ヲ收ムル能ハサルモノトス

第二 議題

△

陸海軍ニ於テ新發明ノ火器及爆裂藥若クハ現今ノ大砲及小銃ニ使用スル火藥ヨリ一層強烈ナル新火藥ノ使用ヲ禁止スルコト(若クハ現今使用スル火藥ヨリ一層強烈ナル新火藥ヲ大砲小銃ニ使用スルコトヲ禁スト訳スル方原文ニ適フ如シ又新發明ノ火器ハ原文ニ如何ナル種類ヲ問ハスノ冠字アルコトヲ注意スヘシ故ニ原文ニ依ルモ此火器ナル文字ハ普通ニ砲銃ヲ意味スルモノナルニ係ラズ今ハ暫ク水雷モ包含スルモノトシテ解釈スル方便ナラン)
△註記「新發明ノ字ハ爆裂藥マテ限スヘキモノナリ」
右ニ対スル意見

現ニ存在スル火器、爆裂藥及火藥ノ外新タニ發明スル所ノモノニシテ無益ナル慘毒ト苦痛ヲ交戦者ニ与フルカ如キモノヲ使用スルコトヲ禁止スルノ趣意ニ対シテハ敢テ之ニ反對スルノ理由ヲ見スト雖モ本問題ハ列國ノ全会一致ニ非ルヨリハ協定ノ効果ヲ收ムル能ハサルモノトス

旨ト相容レサルノ点ヲ発見スル能ハス宜シク此民力休養ノ時代ヲ利用シテ大ニ將來ニ向テ富國強兵ノ基礎ヲ固ムヘク又平和會議ノ結果トシテ其縮盟上拘束ノ義務ナキ事業ハ此時間ニ於テ大ニ開闢蓄積ヲ努ムルト同時ニ世界列強ノ動靜ヲ察シ常ニ彼等ノ致ス所トナラサランコトヲ慮ルヘキハ勿論ナリトス

試ミニ露國外務大臣ガ客年十二月ニ於テ在聖比特斯堡、各國使臣ニ回附シタリト云フ議題ニ就テ意見ヲ附スルコト左ノ如シ

第一 議題

或ル一定ノ期限間ハ陸海軍ノ現數及ヒ其經費ノ額ヲ増加セサル件ニ関スル協定ヲ為ス事

右ニ対スル意見

列國一致協定ヲ希フニ當リテハ敢テ之ニ反對スルノ理由ヲ見ズト雖モ既定ノ計畫ハ之ヲ阻止スルコトヲ容ルサズ而シテ本問題ハ列國ノ全会一致ニ非ルヨリハ協定ノ効果ヲ收ムル能ハサルモノトス

且將來ニ於テ現今ノ兵數及經費ヲ減少スルヲ得ヘキ方法ヲ豫メ講スル事
右ニ対スル意見

第三 議題

現在非常ナル強カラ有スル爆裂藥ヲ野戰ニ使用スルノ制限ヲ定メ且ツ輕氣球ヨリ彈丸若クハ爆裂藥ヲ投下シ又ハ他ノ類似ノ方法ヲ以テ之ヲ投スルヲ禁止スルコト

右ニ対スル意見

第二議題ニ対スル意見ニ同ジ

第四 議題

海戰ニ於テ水底水雷艇若クハ潜水水雷艇或ハ他ノ類似ノ破壊器ノ使用ヲ禁ス

右ニ対スル意見書

列國一致シテ協定ヲ希フニ當リテハ敢テ之ニ反對スルノ理由ヲ見ズト雖モ非縮盟國、遠盟國並ニ縮盟國ト雖モ非縮盟國ノ之ニ同盟加勢スルノ場合ニ対シテ我權利ヲ保留シ若クハ之ヲ使用ノ權利ヲ回復シ得ヘキハ勿論タルヘシ故ニ我ハ縮盟國ニ対シテ其使用ノ禁ヲ約束スルト同時ニ此ノ種ノ兵器ヲ製造スルノ權利ヲ保留スヘキモノトス今後ハ衝角附軍艦ヲ製造セサルコトヲ約定スルコト

右ニ対スル意見

原則トシテ列國一致シテ協定ヲ希フニ當リテハ敢テ之ニ反對スルノ理由ヲ認メスト雖モ本問題ハ列國ノ全会一致

第三章 軍縮第二回提案ト各国ノ意向 六一

ニ非ルヨリハ協定ノ効果ヲ收ムル能ハサルモノトス

第五 議題

千八百六十四年「ジエネーヴ」條約ノ條項ヲ千八百六十八年追加條約ノ基礎ニ依リ海戰ニ適用スルコト

右ニ對スル意見

博愛ノ大旨ニ基キ贊同ノ意ヲ表スヘシ

第六 議題

前項同一ノ理由ニ依リ海戰中及海戰後ニ於テ遭難者救助ニ從事スル船舶若クハ端艇ニ中立權ヲ許スルコト

右ニ對スル意見

博愛ノ大旨ニ基キ贊同ノ意ヲ表スヘシ

第七 議題

千八百七十四年比律悉ノ萬国会議ノ成案ニシテ今日ニ至ルモ未タ各国ノ批准ヲ經サル戰時ノ法律慣例ニ關スル宣言書ヲ改正スルコト

右ニ對スル意見

人道ノ大旨ニ基キ贊同ノ意ヲ表スヘシ

第八 議題

國ト國トノ交戰ヲ豫防スルノ目的ニ於ケル厚意幫助、居中

調停、自由中裁ノ精神ヲ共諾シ之ヲ實施スルノ方法ト一様ノ手続ヲ協定スルコト

右ニ對スル意見

人文發達ノ為メ原則トシテ贊同スヘシト雖モ強弱兩國間ニ公平ヲ維持スルノ立脚点ヲ求ムルニ於テ慎重ナラサルヘカラス

訓令案

貴官今回和蘭國海牙府ニ於テ開会スベキ萬國平和會議ヘトシテ派遣センメラレ候ニ付海軍ニ關スル事項ニ就テハ專ラ本訓令ヲ遵守スベシ

第一條 千八百九十八年十二月三十日附露國外務大臣ヨリ同國駐劄林特命全權公使ニ回附ノ公文（別冊甲号）中萬國平和會議議題ナルモノニ對シテハ別冊乙号ノ解釈及意見ニ拠ルベシ

但シ今後該議題ニシテ修正ヲ經テ趣意ノ變更ヲ見ルトキハ此限ニ非ズ

第二條 列國協同一致シテ希フ所ノ問題ニ對シテハ敢テ反對スル理由ヲ認メズト雖モ多クノ場合ハ列國ノ全会一致ニ非ルヨリハ協定ノ効果ヲ收ムル能ハザルコトヲ忘ルベカラズ

又或物件ノ使用禁止等ニ關シテハ非締盟國、連盟國並ニ締盟國ト雖モ非締盟國ト同盟スルノ場合ニ對シテハ其事

項ノ使用權利ヲ我レニ保留シ得ベキハ勿論タルベシ

第三條 列國ノ一般兵力ニ干繋スル問題ハ列國ノ全会一致ニ非ルヨリハ協定ノ効果ヲ收ムル能ハザルコトヲ忘ルベカラス例セバ露國政府提案ノ第一議題ノ如キ是ナリ

第四條 平和ノ大旨ニ基ク所ノ減兵問題ニ關シテハ第二條

第一項ノ精神ニ遵由スルト同時ニ其我兵力ハ協定成立ノ後ニ於テ我レノ認メテ以テ自衛ニ必要ナル兵力ト為スモノヨリ以下ノ程度ニ削減スルヲ容ルサズ

一、自衛ニ必要トスル所ノ兵備ハ平和ノ基礎ニ於テ列國各自力是ヨリ以上ニ擴張セザルベシト締盟セル所ノ兵力ノ多寡ニ顧ミテ之ヲ決定スベシ

二、協定上若シ第一ノ方法ヲ待ツ能ハズシテ自國ノ兵力程度ヲ宣言スルノ要アルトキハ專恣的ニ噸數（特種ノ任務ニ使用スル艦船及水雷艇ヲ除キ三十萬噸）ヲ以テ宣言シ得ベシ但シ此場合ニ於テハ第一ノ精神ニ依リ後ニ至テ宣言ヲ改メ得ベキ權利ヲ保留スベシ

第五條 平和會議ニ對スル方針（別冊丙号）及露國提案第一第二議題ノ修正案（別冊丁号）ハ參考書トシテ本訓令

第三章 軍縮第二回提案ト各国ノ意向 六一

ニ添フルヲ以テ宜シク其趣旨ヲ体シ臨機事ニ応スベシ

第六條 本平和會議ハ平和ノ大旨ニ基クモノナルコトヲ終始忘ルハナク紛爭ヲ招キ惡感情ヲ他ニ与フルカ如キハ最も慎重マザルベカラザルコト、ス

（附屬書二）

軍備縮少會議議題ニ關シ我海軍側意向

平和會議ニ對シテ我ノ執ラントスル方針ニ就テ

茲ニ記スルモノハ曩日會議ノ結果露國ノ提案ニ与ヘタル解釈ニ對シテ更ニ其詳細ノ理由ヲ記スルモノトス

『第一議題ノ（前部）一定ノ年限間海陸軍備ヲ擴張セサルコトヲ約スルコト

既ニ軍備ノ過重ヲ思ヒ且ツ自衛ニ充分ナリト思惟スル國ニ在テハ其共諾ヲ為ス決シテ難カラザルベシト雖モ未タ其自衛ニ充分ナリト自信ナキ國ニ在テハ容易ニ之ヲ甘諾スルコト能ハサルヘシ

故ニ本問題ニシテ協定ノ実ヲ拳ケント思ハバ強勢國ハ其現在ニ止マリ弱勢國ハ其強勢國ト均衡ヲ得ルニ至テ始メテ息ミ如斯シテ各國一樣ニ均衡ノ程度ニ達シタル後ニ於テハ始メテ本問題ニ所謂一定ノ年限間其位置ニ止マルコ

トヲ得ヘク如斯シテ始メテ真ニ理想ニ適シタル平和ノ担保タルコトヲ得ヘキナリ

然ルヲ此均衡ヲ顧ミルコトナク漫ニ現状ヲ一定年間継続スヘシト為ス如キハ其平和ヲ担保スルノ理由其何処ニ在ルコトヲ知ル能ハス故ニ本問題ノ如キハ以上ノ諸点ニ於テ満足スルコトヲ得テ始メテ成立スルコトヲ得ヘキナリ

又本問題ノ如キハ必ズ列強ノ全会一致ヲ俟テ始メテ効果ヲ見ルヘキモノニシテ苟モ列強ノ一国ニシテ加盟セサル如キコトアランカ是其平和ノ基礎ニ於テ其一脚ヲ欠クモノトスニ其土崩瓦解ヲ見ルニ至ラサルモノ夫レ幾許ゾ

夫レ如斯複雑ナル要素ヲ含有スル問題ニシテ列強ノ一致ヲ見ントスルモノ素ヨリ難問ニ屬ス是本問題ノ遂ニ成立ヲ見ルノ希望少ナキ所以トナス

然レトモ其成否ハ暫ク措キ本問題ハ驛頭第一ニ列強使臣ノ間其所見ヲ鬪ハス題目トナルベシ而テ我ノ之ニ對シテハ宜シク前記ノ理由ヲ以テ其不満ノ点ヲ主張スヘシ而シテ彼若シ曰ク然レバ貴國ニ於テハ何ノ程度ヲ標準トシテ本問題ニ所謂停止ノ程度ト自認セラルハヤト問ハバ宜シク左ノ要領ヲ以テ答フヘシ曰ク

而シテ其年限ニ至テハ我ノ欲スルモノハ六ヶ年ヲ標準トスルニ在リ是既定海軍擴張ノ年限ニ当ルモノニシテ他ノ拘束ナシト雖モ我國力ハ其以上ニ擴張スルヲ許サルベクレバナリ

補充基金ノ如キハ全ク補充ノ目的タルヲ以テ擴張ノ意味ニ於テハ全ク本問題ノ範圍外ニ屬スヘキモノトス

次ニ同問題(後部)ノ尙進シテ将来ニ向テ兵備ヲ輕減スルノ方法、ヲ講スルニ至テハ是平和會議ノ趣旨トシテ当然進行スヘキノ順序ニシテ既ニ其原則ヲ容認スルモ誰カ此ノ自然ノ趨勢ニ對シテ不贊ノモノ之レ有ラン然レトモ此事タル獨リ前記ニ所謂勢力均衡ノ点ニ到着シ各国皆其自ラ其停止ノ立脚点ヲ定メタル後ニ於テ始メテ其勢力多寡ニ応ジテ之ヲ通減シ得ヘキノ道理ニ屬ス而モ其道理一篇ノ範圍ニ於ケル公平無我ノ說トシテハ必スシモ行ハル可カラサル事ニ屬セスト雖モ其實際ハ果シテ如何弱肉強食タル此吞噬世界ニ於テ孰レノ俠國アリテカ自ラ進テ其兵力通減ノ說ノ卒先ニ当ルヘキ

虎狼ノ口ヨリ如斯公平無我ノ提議ヲ聴クトセバ寧ロ猾猾的觀察ヲ以テ之ヲ迎ヘサルモノ殆ンド幾何ゾ

我ノ之ニ對スルモノ他ノ列強ニ於テ非常ノ削減ヲ見ルニ

列強ノ停止セントスル所ノ程度多寡ニ顧ミテ始メテ之ヲ決スルヲ得ヘシ

然ルニ列強ニシテ皆如斯主張ヲ為サンニハ到底其議ノ進行ヲ見ルヘカラサルヲ以テ必ズ先ヅ各自ノ自衛ニ必要ト自認スル所ヲ表白スヘシト云フニ至ラン

此場合ニハ我亦止ヲ得サルヲ以テ暫ク擅断的ニ其兵力ト噸數ヲ以テ發表スルヲ得ヘシ但シ其之ヲ為スニハ必ス其列強ノ表白セル所ヲ見タル後ニ於テハ或ハ之ヲ變更スルコトアルヲ保セサル條件ノ下ニ發表スルコトヲ得ヘキモノトス是当然ニ確保スヘキ我ノ地步ニシテ元ヨリ自衛ノ事タル他ノ多寡ヲ顧ミテ然ル後定マルヘキハ理ノ應ニ然ルベキヲ以テナリ然レトモ我變更セハ彼亦變更スベク甲増サバ乙必ズ増スベシ如斯シテ各国遂ニ底止スル所ナクンバ会々其勢力ノ制限ヲ目的トセルノ平和ノ基礎ハ遂ニ動搖シテ却テ増加ノ趨勢ヲ生スルニ至ルベク而テ各使臣ハ其弊ニ堪ヘスト思惟スル結果遂ニ此事行ハルヘカラザルヲ察シテ息ムニ至ルヘキヲ想像セシム前述ノ場合ニ於テ我ノ止ヲ得スシテ發表スヘキ勢力ノ噸數ハ仮リニ左ノ如クナルヘシ

特別ノ役務ニ使用スルノ軍艦噸數ヲ除キ三拾萬噸トス

非ルヨリハ宜シク先ヅ自衛ニ必要ノ標準トスル所ノ三〇萬噸ヨリハ削減スル能ハサルノ說ヲ維持スヘキモノトス要スルニ本問題ノ如キハ其当初ニ在テハ原則トシテ多分各国ノ容認スル所タルヘシ(幸ニ英國伝来ノ孤立主義ニ依リテ驛頭ヨリ之ニ反對打破ヲ試ミルコトナクバ)ト雖モ次第ニ進テ其意義ノ説明ヲ求メ而シテ之ニ對シテ各国カ勝手ナル利害ノ上ニ其意見ヲ鬪ハスニ至ラハ遂ニ種々ノ難問ハ湧起シテ其廢滅ニ終ルヘキハ火ヲ附ルヨリ明ナリ

本問題ノ疑点

外務省公文(反訳)ノ文意ニ依レハ海陸軍ノ兵力ト謂ヘトモ其原文ノ意義ヨリ仔細ニ解スルトキハ其兵力ニハ一種特定ノ意義アルモノナキカノ疑アリ即チ単ニ原文ノ文字ヨリ解釈スルトキハ常備數ト云ヘル意味ヲ帶ヘリ提案ノ精神ヨリ解釈ヲ下ストキハ特定ノ意義ニ非スシテ一般兵力ノ意義ニ解釈スル方当レルモノノ如シ如何トナレハ減兵ノコトタル換言スレハ海陸軍ノ經費ヲ輕減スルニアリ即チ毎年其軍ノ為ニ費ス所ノ經費ヲ減スルニ在リ然ルニ若シ常備數ナル特定ノ主義ヲ以テスルトキハ之ヲ海軍ノ上ニ解釈スルハ稍難渋ノ意義ナレトモ強テ之ヲ以

テ解釈スルトキハ其範圍ハ現役数ヲ維持スル経費ヲ意味スル如クナルヲ以テ軍艦ノ製造ノ如キハ勢ヒ其範圍外ニ置カサルヘカラサルカ如シ是軍費節減ノ精神ヲ解釈スルニ於テ甚ダ其当ヲ得ザルモノノ如シ

即チ本問題ハ左ノ疑点ノ間ニ彷徨ス

一、真ニ常備的ノ意義ニシテ其ノ現在ノ兵数（海軍ニテハ現役艦数）ヲ維持スル経費耳ヲ指スノ謂ナル歟
二、其年度内ニ其軍ノ為ニ要スル經常、臨時一切ノ費用ヲ包含スルノ謂ナル歟

三、或ハ第二ノ内ヨリ拡張費ノ如キ臨時費ヲ範圍外トナシタル謂ナル歟

要スルニ原文ニ所謂 *Efforts* トハ之ヲ海軍ニ於テハ如何ナル意義ニ於テ解釈スヘキカラ究ムルニ在リ

因ニ記ス独文ニテ聖伯得斯堡新聞ニ發表セルモノモ同シク仏文ノ *Efforts* ノ意義ヲ帶ヘリ而シテ独リ英文ノ龍動「タイムス」ニ顯ハル、モノ（千八百九十九年一月十六日）ハ單「Force ナル」般意義ニ於テ之ヲ解釈セリ」

第二議題、即チ新兵器爆發藥ノ使用ヲ禁スル問題、ノ如キ戦争ノ慘毒ヲ軽減セントスル仁愛的提議トシテハ一応欠

リヤ然レトモ問題ハ既ニ提起セラレタリ我ハ之ニ對スルノ解釈ナカルヘカラス

即チ我ハ我既有ノ權利ヲ確保スルノ解釈ニ出ヅベキナリ即チ下瀨火藥ノ如キハ之ヲ問題ノ範圍外ニ置クコトヲ努ムヘキナリ即チ提案ニ所謂新發明トハ我國ニ於テ今日存在セザル所ノ將來ノ發明物ヲ意味スルモノトナスナリ依テ憶フニ將來我力使用ノ權利ヲ確保シテ而シテ一切此種ノ問題ノ為メニ他ノ拘束ヲ受ケズ若クハ他ノ猜疑ヲ買ハサラント欲セハ我ハ此種ノ問題ノ成立ヲ希ハサルノ主意ニ由ルヘキナリ

故ニ此種ノ問題ニ對シテハ可成故障ヲ生セシムルノ側ニ立ツヘキナリ即チ左ノ如キ難題ヲ提起スルモ妙ナルベシ

一、如斯問題ハ全会一致ニ待タザルベカラズ

二、如斯危険ナル問題ハ國家ハ協定スルノ權利アリヤ三、連盟國アリシ場合ハ其制裁ハ如何

本問題ノ如キハ博愛ノ大旨若ハ古來戰律ノ慣例ニヨレハ何人ト雖モ原則トシテ否認セサルヘキ平々凡々ノ問題ナルニ係ラズ一種ノ国情若クハ一種ノ權謀ヲ挿ムトキハ其ノ利害ノ繫ル所夫レ如斯複雑ナルモノニ在リテハ其協定

クベカラザル好箇ノ題目トシテ提起セルニ過キサル可ク列強モ亦一応ハ原則トシテ敢テ之ヲ否認スルモノ勿ルヘシ（戦争ハ劇烈ナル程ニ其慘毒ハ全体ニ於テ却テ鮮ナシト云ヘル論ハ未ダ必ズシモ真理ナシト云フヲ得ス）然レトモ追テ其議題ノ意義ノ説明ヲ求メ而シテ之ヲ自己ノ利害ニ計較スルニ從ヒ着々種々勝手ノ難詰ハ紛起スルニ至ルベシ

若シ所謂爆發藥ナルモノヲシテ真ニ現世未済ニ屬スルモノナラシメンニハ列國別ニ異議ナカルヘキモ仮リニ之ニ反シテ之ヲシテ從來ノ火藥類ニ比較シテ仏ノ所謂「メリニット」英ノ「リドリット」我ノ下瀨火藥等ヲ指スモノナランニハ各自勝手ノ利害ニ於テ其主張ヲ見ルニ至ルヘシ又之ガ賛否ノ裏心ニハ種々ノ魂胆ヲ包蔵スルナルベシ即チ此種ノ新爆發藥ヲ有セサル國ハ喜ンテ之ニ加盟スルニ躊躇セサルベク又此種ノモノヲ有サル國ト雖モ彼ハ我ヨリモ劇烈ノモノヲ有サルナルヘシト想像シテ之カ加盟ヲ願フモノモアルヘク而シテ其中最モ恐ルヘキハ實際ニハ戰場ニ其使用ヲ躊躇セサルモノニシテ而シテ裏面ニハ此仁義ノ大旨ニ加盟セントスルノ虎狼國ナキヲ保シ難シ不知國家ハ如斯危険ヲ賭シテ協定ヲ敢テスルノ權利ア

ハ必ズ不成立ニ非レハ則チ一種無意味ノ協定タルニ過キサルヘシ

故ニ仮令数歩ヲ譲リテ我下瀨火藥ノ如キモ縮盟ニ入ルベキモノトナスモ（仏ノ「メリニット」英ノ「リドリット」ノ如キ縮盟ニ入ルトセハ相互的ニ我亦加盟ヲ辞スル能ハサルベシ）其使用ヲ除クノ外ハ其拘束力ヲ有スベキモノニ非ス況ンヤ製造ノ如キハ全ク問題ノ範圍外ニ屬スヘキモノトス

問題中其他新發明ノ兵器ト謂ヘル如キ我國未ダ特異ナル此種ノ兵器ナキ秋ニ於テハ別ニ痛痒スル所ナク又銃砲ニ用フル火藥問題ノ如キモ亦同シク他ニ超越スルモノナキヲ以テ兵器ニ對スルモノニ同シ只如斯問題ハ小弱ノ強大ニ對シテ利益アル武器ナルヲ以テ其成立ヲ希ハサル側ニ立ツニ於テハ寧ロ賛成ナルモノナリ

第三議題ノ爆發彈ヲ輕氣球ヨリ投下スルコトヲ制限スルモノ、ニ對シテハ第二議題ノ如キ直接ニ我ニ痛痒ヲ与フルモノニ非レバ順当ニ之ヲ仁義主義ヨリ解釈シテ其成立ヲ賛成スルモ可ナリ

第四議題、ノ如キハ同シク第二議題ニ比スレバ頗ル冷淡ナル問題ニ屬ス即チ第二議題ニ於テ新發明ノ兵器ニ對スル

解釈ニ同シキモノトス但シ本問題ノ武器ノ如キハ弱勢国ノ強勢国ニ對シテ頗ル有利ナル武器ナルコトヲ惟ヒ防禦上我地勢ハ此種武器ノ使用ニ適合セサルコトヲ惟ヒ本問題ハ寧ロ成立セサルコトヲ希フ側ニ立ツヘキナリ又縱令成立スルモ列強ノ全会一致ニ俟タサルベカラザル問題ニ屬ス

第一問題ニ對シテ全会一致ナラザル可カラザルノ理由ハ之ヲ記セリ其他兵器問題ノ如キ齊シク全会一致ノ條件ヲ附シテ贊同ノ意ヲ（原則トシテ）表白セルモノハ他ナシ是平和担保ノ一要素トシテ然ラザルヘカラサルヲ以テナリ如何トナレバ縱令列強ニシテ第一問題ニ於テ兵力均衡ノ基礎ノ上ニ現状維持ヲ締盟スト雖モ其後ノ諸問題ニシテ（兵器、爆發物、衝角、潜水艇）苟モ全会一致スルニ非レバ其孤立者ニシテ使用ノ權利ヲ保留センカ其國特リ他ニ超越スルノ勢力ヲ維持スルコトニ相当スルモノニシテ彼ノ十萬噸ノ海軍勢力ハ他ノ十五萬噸ニ匹敵スルカ如キ觀ヲ呈スルニ至ルベシ故ニ凡テ勢力ニ關係フ及ホスベキ諸問題ハ少クモ欧州ノ六強並ニ北米合衆國ノ全会一致ニ非レバ平和ノ基礎ヲシテ鞏固ナラシムル能ハサルヲ以テナリ

最終ノ態度ハ豫行會議ニ提出シ來ル兆候ニ察シテ除ロニ之ヲ表白スルヲ可トスルモノナリ

（附屬書三）

丁号

軍備縮少會議議題ニ關シ我海軍側意向（二）

露國提案ノ第一 議題修正案

第一 議題修正案

「一、列國ハ現在ノ海陸軍ノ勢力ヲ各自ガ自衛ノ為メ
アソリトレーニ絶對的ニ必要ナリト認ムル程度以上
ニ擴張セサルコトヲ約束シ且ツ其ノ經費ハ過重
ハ國民ノ負担ヲ増シ生産力ヲ達ヲ妨害セス
ト認ムル額ニ制限スルコトヲ努ムルコトヲ約束ス」

△註記 第一議題、「文体ハ如何ニテモ此修正案ト同意味ノモノナレバ年限ヲ定ムルヲ要セスシテ露國提案ノ第一條全体ヲ網羅シ得ルモノト思考ス而シテ露國皇帝元來ノ聖意ハ各國軍備ノタメニ國民ノ幸福ト昌榮トヲ害スルヲ憐ムニ出デタルモノナルカ故ニ明文ニ將來各國トモ此ノ如キ程度迄經費ヲ民ニ取ラストノ事ヲ掲クルトキハ

又製造ノ上ニハ拘束力ナキモノトス（締盟上ノ義務ハ製造迄可及ヤ否ヲ究ムルコトヲ要ス）

第五、特ニ國情ヨリ視テ反對スヘキノ点ナキヲ以テ贊成シテ可ナリ

第六、第五ノ解釈ニ同ジ

第七、第五ノ解釈ニ同ジ

第八、贊成シテ可ナリ

但シ強大國ノ強ヲ挾ンテ弱小國ニ臨ム如キコト無キ立脚点ニ其協定ノ基礎ヲ求ムルコトヲ要ス

最終ノ態度ヲ示ス時機

終ニ臨ムテ一ノ注意ニ値スヘキモノアリ曰ク曩ニハ我國情ヨリ平和會議ニ向テ解釈ヲ下シ其大体ニ就テ相容レサルノ点ヲ視サルコトヲ以テセリト雖モ其最終ニ警戒ノ一句ヲ留メタルカ如ク苟モ列強ニシテ或ル一種ノ權謀ヲ其間ニ挾ミ若クハ連衡シテ東亞ノ新興國ニ對シ敢テ本問題ヲ利用セントスル如キ態度ニ出ルモノアランカ宜シク之ニ對シテ備フル所ナカルベカラズ而モ其最終ノ態度ヲ表示スル迄ハ宜シク外交的ノ言辭ニ隠レテ彼ヲシテ捕捉シ易ラシメサルノ態度ヲ執ルヘキナリ

各國共露國皇帝ノ聖意ニ同情ヲ表セルモノナルコトヲ言明スルコトナルト同時ニ唯德義上聊カ拘束ヲ受ケテ一時ニ大擴張ヲ為スニ憚ル位ニシテ他ニ窮屈ナル拘束ヲ受クルヲ要セサルカ故ニ一方ニハ露國ニ体面ヲ保タセ一方ニハ之ガ為メ實際拘束ヲ受クルヲ要セサル好議題トシテ欲迎セラルベキ乎ト思惟ス」

オルレデー エキジスト

二、列國ハ現在ニ存在スル所ノ諸種ノ火器及爆發藥（彈丸推進用ノ砲火藥、炸藥、其他破壞、殺傷ノ為メニ用フル一切ノ軍用爆發藥ヲ包含ス）ヨリ一屬劇烈ニシテアンネッサレー グルエルチー アゴニイ 益ナル慘 毒ト痛 苦トヲ交戦者ニ与フルカ如キモノヲ新ニ發明シ若クハ發明セシメテ戦争ニ使用セサルコトヲ約束ス

△註記 第二議題モ亦タ全ク露國ノ提案ヲ無ニセサルト同時ニ左程他列國ノ自由ヲ束縛セス解釈ニ余裕ヲ与ヘアレハ別段ノ異議ナカルヘシト信ス

第一議題第二修正案

即チ別紙ハ第一修正案ハ漠然ニ過キルカ故ニ噸數ヲ基礎トシテ制限ヲ置カントノ議成立セルトキノ豫備案

一 列国ハ来千九百六年一月一日迄現在ノ海陸軍ノ勢力ヲ左ニ記載スル所ノ程度以上ニ拡張スルコト無キハ勿論海軍ニ在テハ之カ拡張ノ目的ヲ以テ軍艦ノ新造ニ著手セサルコトヲモ約束シ且海陸軍毎年ノ経費ハ前記ノ年限間現年度ノ海陸軍総豫算額ヲ超過セシメサルコトヲ約ス但シ左記ノ排水量(英噸)中ニハ木造及鉄骨木皮ノ諸艦、速力十三節以下ノスループ及砲艦(ブラッセー、ネーバル、アンニユアルニ抛ルヘシ)並ニ水雷駆逐艦及水雷艇ノ排水量ヲ包含セサルモノトス

海 軍

仏 蘭 西

七拾萬噸

日 耳 曼 四拾毫萬噸
グレートブリテン(英国) 百六拾萬噸
伊 太 利 参拾四萬噸
日 本 参拾萬噸
露 西 亜 五拾四萬噸
△註記 本案ニハ壤国及米国ヲ載セス之ニハ甚タシキ利害ノ關係ナケレハナリ然レトモ正当ノ議題ニハ他ノ参列諸国ノ分モ加フヘキハ勿論ナリトス国名ハABC順ニ記載セリ



第四章 第一回萬国平和會議委員任命方ニ関スル

各国意向

六二 明治三十二年八月二十四日

露国外務大臣ヨリ
露国駐劄林公使宛(回文)

萬国平和會議開催提唱並ニ帝國全權任命ニ

関スル件

Le maintien de la paix générale et une réduction possible des armements excessifs qui pèsent sur toutes les nations se présentent, dans la situation actuelle du monde entier, comme l'idéal auquel devraient tendre les efforts de tous les Gouvernements.

Les vues humanitaires et magnanimes de Sa Majesté l'Empereur, mon Auguste Maître, y sont entièrement acquies.

Dans la conviction que ce but élevé répond aux intérêts les plus essentiels et aux vœux légitimes de toutes les Puissances, le Gouvernement Impérial croit

que le moment actuel serait très favorable à la recherche, dans les voies d'une discussion internationale, des moyens les plus efficaces d'assurer à tous les peuples les bienfaits et d'une paix réelle et durable, et de mettre avant tout un terme au développement progressif des armements actuels.

Au cours des vingt dernières années les aspirations à un apaisement général se sont particulièrement affirmées dans la conscience des nations civilisées. La conservation de la paix a été posée comme but de la politique internationale; c'est en son nom que les Grands Etats ont conclu entre eux de puissantes alliances; c'est pour mieux garantir la paix qu'ils ont développé dans des proportions inconnues jusqu'ici leurs forces militaires et qu'ils continuent encore à les accroître, sans reculer devant aucun sacrifice.